

1月2日

「世の光として」

ルカ 2:39-40

武安 宏樹 牧師

山上の説教の主イエスの前は、大勢の群衆と最前列に弟子たちがいました。山といえばモーセがシナイ山で受けた託宣を想起し、重要な説教といえます。13～16節は、祝福を約束されたキリスト者の世における責任についてです。「あなたがた」は原語でも文頭で強調され、「あなたがたこそ」と換言できます。

① 地の塩として(13節)

塩の果たす機能は3つ。1つ目は白さと自然からできることから「純潔」を、2つ目は「防腐剤」として肉の保存に役立ち、3つ目は料理の「味付け」です。塩味のしない料理は無味乾燥ですが(ヨブ 6:6)、加えれば味全体が締まります。これらの機能からキリスト者は地の塩として、純粋な白さを証しすること、世と隔絶するのではなく振りかけられた防腐剤として周囲の墮落を防ぐこと、社会の中で塩気を保ち味のある人、平和を保つ存在となることです(マコ 9:50)。

② 世の光として(14～15節)

「塩」の渋い存在感よりも明瞭に分かるものとして、「光」と言われました。ユダヤ人とりわけ預言者は、自分のあかりは神が灯されることを承知でした。主イエスが「弟子たち＝世の光」と言われたのは、この上なく光栄なことです。それは主イエスが光であり(ヨハ 1:4)、世の闇を照らす方だからです(ヨハ 8:12)。その光は渋い光ではない。ダマスコ途上でサウロが照らされたまばゆい光で、闇の中で行われる罪を白日に晒し、闇の中で死んだ魂を生き返らせる光です。私たちがその光を隠すならば、取り払わなければ光なる神が悲しまれます。

③ 光を輝かせる(16節)

光の覆いを取り払うだけでなく、積極的に輝かせることが求められます。「良い行い」は魅力的という意味も含みます。キリストの光を輝かせる人は、間違いなく魅力的な人、その場に不可欠な存在です。どのように輝かせるか、「りっぱな行い」(Iペテ 2:12)により、周囲に好評を博すものであることです。評価は自分のためではなく、自分の行いを通しキリストを知らしめるためです。キリスト者の本質は神の栄光を現わすため。光のありかには人は集まります。

1月9日

「何か見えるか」

マルコ 8:22-26

武安 宏樹 牧師

① 連れて来られた盲人(22節)

中風(2:1-12)、ろうあの人(7:31-37)と同じく盲人は連れて来られました。それが周囲の人々の信仰か、彼の信仰なのかはここでは記されていませんが、いずれにしても助け人が必要で、期待や恐れなど語りながら来たのでしょう。

② 「何か見えるか」(23～24節)

主イエスは彼に対して、その場で即いやしを行うことはありませんでした。バトンタッチするように彼の手を引いて、静かな場所へ移動して行いました。それは熱狂した群衆を避けるためと、彼の視界の混乱を避けるためでしょう。主イエスはいやしを集会に用いるのではなく、一人の魂の必要のため行った。隔離することと唾を塗ることは、ろうあ者と同じパターンですが、違うのは、「何か見えるか」と質問されながら、いやしが段階的に進められたことです。もちろん一度でできなかったからではない。彼の信仰の不足も考えられます。さらに考えられる理由は、敢えて段階的なことで、彼が時間をかけて視力を得る喜びを味わうことではないでしょうか。そして徐々に眼の前に居られる主イエスが明確になる過程を、彼も弟子たちも体得するためと教えられます。

③ 「はっきり見えるようになった」(25～26節)

両手を当てて視力調整されながら、徐々に見えるようになった彼は最後にもう一度両手を当てられて、漠然と木のように映ったものが人に見えました。完全ないやしを受けた彼の心には、言うまでもなく見える感動がありました。けれども主イエスが望まれたこと、それはいやしがゴールではなくスタートだということでした(イザ 42:6-8)。彼の人生の価値観を根底から覆す強烈な体験に相違ないが、それで終わってはいけないしご自分を忘れてほしくない。いやしを通してキリストを人格的に受け入れて、残された人生を神との契約関係の中で生きる者として、力強く生きてほしいと願われたのではないか。段階的いやしは彼にも弟子たちにも、教育的に示唆を与えたことでしょう。弟子訓練は神の愛と忍耐の中で、時間をかけて霊の目が開かれるからです。

1月16日

「あなたはキリスト」

マルコ 8:27-30

武安 宏樹 牧師

ピリポ、カイザリヤは風光明媚な地ですが、霊的にはかつてバアル信仰の中心地であり、混濁した地でした。主イエスの公生涯における北端であり、これ以降エルサレムでの苦難に向けてひたすら南下することや、マルコ伝における中間地点でもあり、テーマが宣教の力強さから十字架の苦難予告へと変わることから、今日の箇所はいろんな意味で「折り返し地点」と言えます。

「人々」は主イエスを旧約の偉大な預言者の一人としか見ていませんでした。全ての預言者の働きはキリストを指し示すためなのですが、彼らは最後の救い主だと認識していませんでした。誰にも理解されないと公生涯は徒労に終わってしまいます。主イエスが全身全霊かけて聞いたかったこと。それは、「あなたはどうか」です。ペテロは「あなたは、キリスト」と告白しました。人々の待望するメシヤ像とは政治的、武力的に他国を制圧する王の姿でした。しかしキリストは正反対に、苦難の僕、平和の君として霊的勝利を志向する。それは理解不能に近いものでした。しかし彼の告白に神の力が注がれました。後の彼の大祭司の中庭での否認を思えば、頭理解に過ぎない未熟な告白と言えるかもしれない。そんな告白をも主イエスは喜ばれたのです(マタ 16:17)。

告白の語源は、旧約では救いを感謝するときの賛美によく使われています。神の力強く恵みに満ちた働きを認識することは、認罪にもつながるでしょう。ペテロは召命時に大漁の恵みを体験し、「罪深い人間」(ルカ 5:8)と認めました。新約では「キリストを信じる信仰を人前で認める」と特別な意味があります。今日の箇所での告白は、主イエスと弟子たちの前だから内輪での告白でした。対して大祭司の中庭では「否認か死か」選択を迫られ、彼はできませんでした。私たちの告白も真剣になされたとしても不完全だったり、躓きを覚えることもあるかもしれません。しかし告白し続ける中で揺るがぬ信仰へ成長します。この箇所が盲人のいやしの後に置かれたのは、「見えます」(24節)と同様に、私たちも「あなたは、キリスト」と告白しながら、神の交わりの中で開かれる。黙っているのではなく、告白し続けることで恵みを受ける喜びがあるのです。

1月23日

「十字架を負う」

マルコ 8:31-9:1

武安 宏樹 牧師

① 十字架の予告(31~33節)

主イエスは弟子たちが払うべき代価と意味について、今日の箇所を初めとして計3回語られます。「人の子」(ダニ 7:13-14)とは力強いさばき主として、政治的な敵に打ち勝つイメージを、弟子たち含め世の中は持っていました。実際これまでの主イエスの働きは、彼らの想像を裏切るものではなかった。しかし主イエスが断言された行く末は、彼らの期待を全く裏切るものでした。ペテロの叱責は見当違いも甚だしいものでしたが、世の中の意見を代表した。さらに言えば、世と妥協した私たちキリスト者像と言えはしないでしょうか。主イエスが激しい口調で叱責されたのは、世的な考えの背後にサタンの影を見たからです(マタ 4)。「下がれ。サタン。」とは「わたしの後に下がれ」の意です。愛するペテロだから一喝し、打ち砕き、十字架の道の厳しさを教えたのです。

② 十字架への招き(34~37節)

「わたしの後に」について来なさいと、弟子だけでなく群衆にも主は言われた。弟子としての門は広く開かれています。また自発的に従うよう求められます。「自分を捨て」とは徹底的に否定する意です。ペテロの最期はどうでしょうか。伝承ではローマにて十字架につけられたとありますが、そこに至るまでに、さまざま過ちを犯し、ついには十字架を前に否認する失態を晒し、失意の中、元の漁師に戻ろうとしました。そんな彼に主イエスは再献身のチャレンジをしました。彼の献身の志は、徹底的に砕かれ愛される中で練り清められます。弟子道とは厳しいものです。「自分」という接頭辞のつく全てに「ノー」と宣言するからです。しかしただ滅私奉公、禁欲して灰になって終わるのではない。キリストと共に死ぬ向こうには、豊かないのちがあふれています(ガラ 2:20)。パウロはそのあまりの素晴らしさのゆえ、喜んで全てを捨てました(ピリ 3:7-8)。

③ 終わりの日の復活(38~9章1節)

弟子たちが理解しがたいのは、「苦難のしもべ像」と「力強い審判主像」とを、頭の中でどう折り合いをつけるかでした。主イエスの語られた地上の祝福は、氷山の一角です。キリスト者は終わりの日に本格的に祝福を受け取ります。初臨のキリストは、私たちの罪の苦しみを担って贖いを成し遂げるために、再臨のキリストは、ダニエル書のように栄光に満ちた姿で来られるのです。その時に地上で主の十字架を負った者は、はるかに優る祝福を受け取ります。

1月30日

「栄光の輝き」

マルコ 9:2-13

武安 宏樹 牧師

主イエスの示された十字架の道は、弟子たちが受け止めがたいものでした。「神の国」(9:1)に彼らは終末的色彩をまだ感じ取っていなかったでしょうが、すでに公生涯の始めに、悔い改めの前提として宣言しておられました(1:15)。さしあたって彼らは、双つのメシヤ像がどうつながるかがまだ未整理でした。

共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)に共通して、十字架の予告と招きに今日の記事はつづいています。空白の約1週間の間に彼らはどう受け止めたのでしょうか。主イエスはひそかに弟子3人だけ伴って、高い山(ヘルモン山?)へ登りました。山頂にて彼らは、主イエスの御姿が神々しく真っ白に変わる驚きの光景を、目の当たりにしました(マタ 17:2/ルカ 9:29)。「変わる」とは青虫→蝶に羽化するような「変態」「変身」の意ですが、これは自然界やアニメの話ではありません。「神の子イエス、キリスト」(1:1)とはどのような方か。視覚と臨在を通して現されたのは、「世の始まる前から御父と共に持っていた栄光」(ヨハ 17:5)でした。それだけで強烈なのに、さらに律法の代表者モーセと預言者の代表エリヤが、主イエスと会合している！ 弟子たちはこの光景に恐れて、我を失いました。

弟子たちは強烈な聖霊体験をした。体験は脳裏に焼き付き一生忘れぬもの。強烈な恵みをいただくと罪人の性か、私たちは何故か穴埋めしようとしみます。ペテロは恐れに突き動かされて、3人の幕屋を造ると僭越な宣言をしました。彼らには真の幕屋は何か考える余裕はなく、彼らが経験した素晴らしい臨在は、終わりの時代に建造物ではなく、キリストのからだの内に存在することを、まだ気づきませんでした。「住む」(ヨハ 1:14)は「幕屋」と原語の語幹が同一です。臨在の象徴である雲が彼らを取り囲み(出 40:34-35)、天の御声が発せられた。内容は、主イエスが偉大なモーセやエリヤとも次元の異なる「神のひとり子」、だから抗議した十字架の予告さえも全て、聞かなければならないということ。幕屋の中にいつまでも栄光を留め置いて、恍惚状態に浸ってはいけません。向きを変えて出発せよということ。弟子たちの「変貌山」における体験は、悟りの鈍い彼らに理解を促すため必要でした。そして山頂を後にしました。私たちが時に体験の恵みによって、迷妄が打ち砕かれます。それが何を意味するのか主にあって吟味しつつ、さらなる成長目指し一歩踏み出すことです。

2月6日

「三つの原則～原始教会に学ぶ」

使徒 2:40-47
武安 宏樹 牧師

① 原始教会の姿から学ぶ(使徒2:40～47)

日本語で「教会」は新約のみですが、ギリシャ語「エクレシア」は旧約 70 人訳に登場します。「神の民」「召し出された者の集まり」の意だから、旧約時代は、イスラエルが選びの民で、新約に入るとキリスト者となり異邦人にも広がる。パウロは、「神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び」(エペ 1:4)と言います。教会は使徒たち以前に、旧約の土台にも立っています。とはいえ主イエスの言われた「わたしの教会」(マタ 16:18)とは、いわゆる使徒 2 章以降の教会を指すでしょう。ここに聖霊降臨に伴う力強さが見られます。霊的なムーブメントは個々だけでなく、兄弟姉妹の交わりにも注がれました。一つに使徒たちの教えに専念する、つまり聖書の学びに集中したことです。二つ目に学ぶだけでなく「交わり」「パン裂き」「祈り」の実践を伴うことです。三つ目に教会はいつそ主を恐れ、私財を共有化し、喜びにあふれたことで、その美しい交わりが地域の証しとなり、門を叩く者が後絶たないことです。この素晴らしい主にある交わりを、パウロは独創的な「キリストのからだ」論に、私たちの志向すべき教会像として、神学的才能を用いてまとめてくれました。

② 三つの原則から(同盟教団教憲「三本柱」より)

a)「聖書信仰」

原始教会の人々の如く、私たちも聖書の教えを絶対視しているでしょうか。御言葉に従おうとしないと無気力になり、信仰が萎えて、流されていきます。しまいには大きな罪を犯すに至ります。逆に絶対視すれば御霊が働かれます。大事なのは御言葉にできるだけ近い生活を送ること。礼拝、祈禱会の他にも、日々のデボーションと聖書通読に励み、積極的に分かち合う場を持つこと。

b)「合議制」

牧師、役員、信徒みんなで老若男女問わず、民主的に話し合っ決めて、「祭司=橋を架ける人の意」コミュニケーションで神の愛を橋渡ししましょう。

c)「宣教協力」

一致した「からだ」が外を向いて、小さな違いを越えて協力することです。私たちが陥りがちなのは、自分たちの教会、教団、教派が絶対だと思いこみ、外に目を向けないことです。手を取り合う宣教協力は「からだ」の回復です。

2月13日

「いやしの祈り」

マルコ 9:14-29
武安 宏樹 牧師

栄光に満ちた変貌山を後に、主イエスと弟子たち3人が麓で目にしたのは、いやしに失敗して律法学者たちとの議論に巻き込まれた残留組の姿でした。その狭間で「てんかん」(マタ 17:15)に苦しむ子と、無力感に苛まれる親の姿。場を支配したのは、不信仰、絶望、不毛な神学論争に満ちた暗い空気でした。

この不信仰な人々、とりわけ弟子たちを主イエスは嘆かれた。親も不信仰ながら、弟子たちに期待して子を連れてきたから、一定の責任は果している。弟子たちは権威(6:7)を与えられながら、過去の成功で油断したのか(6:13)、信仰の弾丸が込められないで、空砲を撃つような無力な戦いをしていました。

悪霊はゲラサの狂人の如く(5:1-20)、主イエスを見て激しく抵抗しました。ここから親とのやりとりが興味深い。それは通り一遍の追い出し方ではなく、あえてカウンセリングを施すことで、苦しみと絶望を親身に受け止めた上で、彼の口で半信半疑の現状を告白させます。「もし、おできになるものなら」は、ツアラート患者の「御心ならば」(1:40 新共同訳)とは信仰の次元が全く違う。主イエスは追い出す前にまずカウンセリングで魂と関わり、不信仰を正され、「信じる者には何でもできる」(9:23 新共同訳)ことを悟るように導きました。そして彼は涙ながらに(異本)、「信じます。不信仰な私をお助けください。」と白旗を挙げた。これは切羽詰まって出た信仰と謙遜の表明、無私の叫びです。取税人の祈りです(ルカ 18:13)。主イエスは彼のこの祈りを待ち望んだのです。

主イエスは呪文や祈禱書とは違う、鬼気迫る個人的な霊的対決をしました。居場所を追い出された悪霊は断末魔の苦しみで子をひきつけさせ、退去した。何と霊的戦いは激しいことか。信仰は当然のこと、体力、精神力、霊的感覚等総動員しなければ勝利できない。逆に双方が主のみ見上げれば勝利できます。主イエスの御業は、共通してまずその人や地域の信仰を見てから行われます。弟子たちには「信仰が薄いから」(マタ 17:20)と指摘されました。信仰とは何か。私たちも弟子たちのように、祈りや信仰の蓄積をよりどころとしていないか。祈りは主権的な神の恵みとその交わりを通して、へりくだる中で導かれます(イザ 57:15/Ⅱ歴 7:14-15)。親の霊的な祈りは御霊のとりなしでした(ロマ 8:26)。神の権威によりたのむことが、私たちが祈るべき霊的解放の勝利の秘訣です。

2月20日

「虹の福音」

創世記 9:9-17

柳本 秀良 師

「虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」(9:16)

神さまともあろうお方が、空に虹を出してそれをご覧になり、思い出さねばならないような契約とは、どのようなものだろうか？

人間は神によって創造されました。神はそれをよしとされました。しかし、人間は神に耳を傾けることをやめて自分勝手な生き方をする様になりました。「地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」(創 6:5)神は地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められました。そして人を地の面から消し去ろうと、大洪水を起こされました。ただ、ノアとその家族だけがその神の裁きを免れました。

洪水の後、箱舟を出てノアはまずしたことは神に礼拝をささげました。神はなだめの香りかぎ(ノアの礼拝を受け入れました)、二度と人を罪ゆえさばかないと、神は人との間に契約を結ばれました。その契約は罪人である私たちにとって福音以外の何ものでもありません。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」(ヨハネ 3:16)十字架上でイエス様の叫びは本来は私たちの叫びです。神は人を愛し、裁かれ滅ぼされるべき道から救ってくださり、赦され生かされる道へと私たちを導かれています。

柳本秀良牧師 紹介

1964年大阪に生まれる。1989年関西学院大学神学部を卒業し、日本基督教団補教師となり、宮崎県の都城妻ヶ丘教会伝道師となる。1991年に正教師となり、1992年から約二年間、熊本県阿蘇で開拓伝道に取り組む。1994年より大分県の大分教会副牧師となり、同時に学校法人大分栄光学園愛隣幼稚園副園長となり、キリスト教保育に取り組む。1998年から鹿児島県の指宿教会牧師となり、同時に鹿児島敬愛学園聖亜幼稚園園長となる。2005年に指宿での使命を終え、岡崎教会の牧師として赴任、現在に至る。

1990年に、妻・保子(神学部の後輩)と結婚。翌年双子の男子を与えられる。

現在子どもたちは両親と同じ、関西学院大学神学部で神学生として学んでいる。

2月27日

「仕える者に」

マルコ 9:30-37
武安 宏樹 牧師

第1回目の苦難予告(8:31)直後に変貌山と悪霊追い出し(9:2-29)が続き、主イエスに対する弟子たちのイメージは、まだ苦難からは程遠いものでした。ガリラヤを素通りして、主イエスは第2回目予告を通し、教育を行います。困惑した彼らはまだ受け止めることも、真意を確かめることもできません。それより彼らの関心事は、「だれが一番偉いか」をはっきりさせることでした。

主イエスは弟子が個人的に成長することを、否定されたものではありません。彼らが前向きな自己研鑽ではなく、他の弟子より抜きん出て「ナンバー2」の座を手に入れることに腐心していたのが問題でした。彼らのすなる宗教家像とは教祖のいすに座り、しもべに全ての世話をさせ、霊的な言葉を発したら、罪が赦され、病気が治り、悪霊が出ていく。そして名声が高まるというもの。世界は学校受験や社会の出世に至るまで、人より偉くなるための競争に満ち、新興宗教は人間の欲望を巧みに利用し、ピラミッド型組織を構成しています。弟子に限らず、私たちキリスト者や教会の内にもそのような上昇志向が存在してはいないでしょうか。主イエスが教えられたのは、正反対の十字架です。

その具体例として呼んだのは高名な宗教家ではなく、無名の子どもでした。弟子たちは呆気にとられ顔を見合わせたことでしょう。子どもは衣食住にも面倒を見てもらわなければならない、社会的に取るに足らない弱い存在です。けれども弟子の中で抜きん出たい者は、子どもを受け入れるように心を低く、世の底辺の人々に喜んで仕え、耳を傾け、神の被造物また栄光が現れる存在として尊ぶ謙遜さが必要なのだと、主イエスは子どもを抱いて言われました。これこそが自己実現ではなく自己犠牲に生きる真の宗教家像です。私たちの心のベクトルを上向きから下向きに変えること。下向きは卑屈とは違います。神の愛を知る者は、その分だけ自分の罪深さと卑小さを認めることができる。主イエスは十字架の上では世に対して無力な子どものように、従順でした。肉に死に霊に生きることで、私たちは初めて視線を下げて心の共有ができる。全てのキリスト者が手をつなぐ輪の中に、謙遜な幼子イエスを見るべきです。

3月6日

「聖書について～同盟教団信仰告白1」

Ⅱ テモテ 3:14-17

武安 宏樹 牧師

「旧. 新約聖書 66 巻は、すべて神の靈感によって記された誤りのない神のことばであって、救い主イエス・キリストを顕わし、救いの道を教え、信仰と生活の唯一絶対の規範である。」
(同盟教団教憲第2条1)

Ⅱ テモテ書は老パウロが若き牧者テモテに宛てた、遺書のような手紙です。3章は「終わりの日には困難な時代がやって来る」(1節)と始まり、2節以降にどのような者が現れるか、「悪人や詐欺師たち」(13節)の実態を暴きます。「終わりの日」とは広義では初臨～再臨、狭義では再臨直前の期間を指します。今日の民族・国家間紛争、災害、食糧難を見れば、終末的預言そのものであり、偽教師・偽預言者・偽兄弟出現と惑わしの横行を聖書は語ります(マコ 13:1 ヨハ)。「けれどもあなたは」この時代だからこそ、聖書の真理の死守を厳命します。浮沈を繰り返し霊の目を曇らせる世の知恵とは異なり、神の真実は不変です。不器用に神に信頼する人生は世から見れば愚かですが、無駄に終わりません(Ⅰコリ 1:21)。ただ知識だけでなく生きた神のことばとして聖書を信頼する時、私たちは悪しき者の攻撃から守られ神のいのちの恵みに与ります(ヨハ 20:31)。

旧. 新約聖書は 2000 年以上前の史実を記しただけの書物ではありません。なぜ生きているのか。それは「神の靈感＝いぶき」が働いておられるからです。それは人間のひらめき・ヤマ感・第六感とは違います。不思議な聖霊の働きは、著者の能力・知性を用いて、聖書に用いられる資料や用語の選択を監督し、聖書を全体として誤りなき神のことばとして結実しました。科学・理性では全て証明されたわけではありませんが、近年は聖書考古学・オリエント研究の発達で記事の正しさがますます立証されています。トマスは言われました。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。～見ずに信じる者は幸い」(ヨハ 20:27)。信じる祝福を「ことばに尽くすことのできない栄えに満ちた喜び」(Ⅰペテ 1:8)とペテロも言います。聖書のことばは権威ある神のことばです。カルヴァンは聖書の真の意味は「聖霊の照明」により、明らかにされると言います。客観的に正しい聖書のことばを、主観的に深い洞察に聖霊が導いてくださる。このバランスによって、無味乾燥な冷たさや無分別な熱狂から守られます。「教え・戒め・矯正・義の訓練」の前2つは教理的、後2つは実践的な事柄です。終わりの時代に御言葉に取り扱われ、霊的戦いに勝利する者となりましょう。

3月13日

「ペテロの回復と2度目の召命」

ヨハネ 21:1-23

佐野 慶 師

ペテロはイエスが十字架に向かわれた時、3度イエスを否み裏切りました。その後イエスはよみがえりペテロにも会われましたが、この時までペテロは、悔い改めることができずにいました。彼は、以前のような自信家ではなく、自分は自分の意思をつらぬくこともできない弱い者であることを、自分自身認めずにはおれませんでした。

ペテロはある日、「私は漁に行く。」(21:3)と言って、漁に出かけました。なぜ「人間をとる漁師」(マタ 4:19)に召されたペテロが、漁に行かなければならなかったのでしょうか。経済的な理由もあったでしょうが、それ以上に、心の空しさを紛らわせるため、昔、生き甲斐であり、喜びであったものに目を向けたのでしょうか。しかし魚は獲れずペテロは疲れと失意のうちにありました。しかしイエスはそのようなペテロのところに現れ、弟子に召された時のことを思い出させるような大漁の奇跡を行われました(21:6)。

食事の後、イエスはペテロに「あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか」(21:15)と問いかけられます。以前のペテロなら、自信たっぷりに、「はい」と答えていたでしょう。しかし、今のペテロにはそれはできませんでした。彼はイエスのことばによって自分の不完全さ、弱さをイエスの前にさらけ出すことになりました。イエスは同じように私たちの罪や弱さを、イエスの前にさらけ出されるお方です。

イエスは自分の弱さを知ったペテロに、「わたしの羊を飼いなさい」(21:17)と言われました。イエスは裏切り者のペテロに、ご自分の羊を守り、養い、導くという、新しい務めを与えられたのです。イエスは、ペテロが殉教の死を遂げることを予告しておられますが(21:18)、これは、「死をもってしても、あなたは神の栄光を現わすのだ」という勝利の約束です(21:19)。イエスはペテロに、使命を与え、勝利の約束を与え、もう一度遣わされました。イエスは私たちを取り扱われ、もう一度遣わそうとしておられます。「あなたは、わたしに従いなさい」(21:22)という主の声に従っていきましょう。

3月20日

「終末への備え」

Ⅱペテロ 3:8-13

武安 宏樹 牧師

東日本大震災被災地の惨状を報道で目にするたびに、終わりの日の前兆を思わされます。今こそ、神の摂理を知るキリスト者の真価が問われています。それと共に、被災された方々の上に神の憐れみが注がれるよう祈られます。

Ⅱペテロ書は終わりの時代に現れて、純真な信徒を惑わす偽教師への警告、惑わしの霊との「真理戦」に直面するキリスト者へ、励ましが記されています。終わりの日の再臨。最後の審判の到来を、「あざける者」(4節)は信じませんが、それは人間が勝手に判断したに過ぎず、ストップウォッチは神の手の中にあります。「人は自分の時を知らない」(伝道 9:12)私たちは時間を大事に生きることです。その時が今かと待ち望みながらも、遅延に苛立ちを募らせる信徒が出てきた。これは神のいたずらでなく、罪人を救うための慈愛と寛容ゆえの遅延であり、私たちは敬虔な生活と福音宣教を求められています(Ⅰペテ 4:7/Ⅱテモ 4:1-2)。「あざける者」に終わりの時は、「夜中の盗人のように」(Ⅰテサ 5:2-4)急襲します。隠れた良い業も悪い業も、「かまどのように燃える火」(マラ 4:1)で露にされます。

この日は不信者にとっては天地崩壊の恐ろしい日ですが、キリスト者には、主の現れを前に無様な生活は見せないよう、敬虔に進ませる動機となります。御霊に支配された敬虔な生活と福音宣教の進展は、神のご計画の中で大いに時間を早めるための判断材料となり、反対に不信仰や怠惰は遅延となります(マタ 24:14)。悪魔は最終的に滅ぼされ(黙 20:10)、毒麦は焼かれ(マタ 13:30)、キリスト者は全て天に引き上げられ救いの完成、栄化の至福の時を迎えます。墮落によって崩壊した美しい創造の秩序が、「新天新地」で復活します(13節)。私たちは世の科学技術や知恵の結集が、津波に容易に飲まれるのを見ました。人々は空虚感の一方で不変なる方を求めています。時の間近さを意識しつつ、いよいよ神の愛を伝え怠惰を悔い改め、祈りに専心しようではありませんか。

3月27日

「与える人になろう」

Ⅱコリント 9:6-15

武安 宏樹 牧師

パウロはエルサレム教会の貧しい聖徒のために、コリントの教会に献金を募ります。その中でマケドニヤの教会の熱心に捧げる姿勢を引き合いに出しながら、金額の競争ではなく、双方に励ましとなるよう願っていたのです。与えるということは信仰の要ることです。目に見えて残高が減るからです。けれども貧しくとも信仰によって捧げると、その分どこからかお金も入り、困窮しないのに対し、惜しむとかえって減るのが霊的原則です(箴 11:24-25)。主イエスもまた、寛大に与える者の祝福について、約束しています(ルカ 6:38)。渋々でなく、喜んで与えることが御心です。それは神が恵みの神だからです。

8節で「すべて」を意味するギリシャ語が、畳みかけるように5回登場します。神が何でも備えてくださるゆえに捧げる。「どれだけ」とは数量の多少でなく、やもめが「乏しい中から、～生活費の全部を」(マコ 12:44)神殿で捧げた箇所にて明らかなように、心の問題です。また金品に限らず、労力や時間も含まれます。新約聖書は報いを否定しません。種蒔き同様、多く蒔けば多く刈り取ります。また他人に多く与えてきた人は、今度は自分が苦境の時に多く与えられます。惜しみなく与える人を通して与え主である神の人格が現され、成長します。パウロの募金の最終目的は、なされる感謝の全てが神に帰されることでした。

「奉仕」(12節)とは神や他人の下で、または教会で働くことを想像しますが、旧約の祭儀に使われる語です(民 8:)。このことからパウロは私たちの奉仕が、「香ばしいかおり～神が喜んで受けてくださる供え物」(ピリ 4:18)と言います。英語では「service」だから礼拝に結びつきます。与えることは礼拝行為です。礼拝で恵みの応答として、献金を捧げる瞬間は最も信仰の間われる瞬間です。そこには表面的ではなく心から、全身からの生きた応答が必要です(ロマ 12:1)。パウロはこの献金の目的が、異邦人教会→エルサレム教会に捧げられるものであることから、広義では割礼問題など反目もあった異邦人とユダヤ人との和解とキリストのからだにある一致を願っています。和解はいやしを与え、新しい協力関係を築くことで、できなかったことができるようになります。「賜物」=イエス。キリスト。奉仕と捧げ物の頂点は主イエスです(ヨハ 15:13)。主の奉仕の働きのため金も物品も時間も労力も、全人格まで捧げましょう。

4月3日

「神について～同盟教団信仰告白②」

創世記 17:1-8
武安 宏樹 牧師

「神は霊であって、唯一全能の主である。神は永遠に父と子と聖霊の三位一体であって、その本質において同一であり、力と栄光とを等しくする。父なる神は、永遠のみ旨により万物を創造し、その造られたものの絶対主権者であられる。」（同盟教団教憲第2条2）

① 創造と統治の神について

「初めに、神が天と地を創造した。」(創 1:1)とあるように、聖書は神の存在を前提としています。私たちは神の存在を2つの方法で知ることができます。一つ目は「一般啓示」で自然界、動植物の壮かさ、緻密さや、人間の深い心に、神の作品であると知ること。二つ目は「特別啓示」で神の直接の語りかけです。神は見えない霊なる方ですが(ヨハ 4:24)、ご自分の存在を私たちに知らせたいと願っておられます。見えないお方を知るには、真実な心と信仰が必要です。地域によって形は違えど、私たちは正しい神認識を妨げる偶像との戦いが、避けられません。神は「ただひとり」(申 6:4)、他の神々は滅びます(エレ 10:11)。アブラハムは神に選出され、祝福を約束され、「お告げになったとおりに」(創 12:4)信仰の一步を踏み出しました。その道筋は平坦とは言えず、幾多の弱さや失敗もありましたが、約束を握りしめ、御声を頼りに前進したことで、後世には「信仰の人」と称賛されるようになったのです。アブラハムと神との関係を見ると、私たちと交わりを持たれる神であり、この交わりの中で成長するのです。主イエスは父と堅い信頼関係で結ばれていたのです(マコ 14:36)。

② 三位一体の神について

主なる神のご人格で、他宗教にない特性が「父、子、聖霊」の三位一体です。聖書中にこの語は登場しませんが、祝祷(Ⅱコリ 13:13)などに見いだせます。「一体」とあるので序列は存在しませんが、敢えて相違を言えば守備範囲です。父＝創造、統治、子＝救いの完成、聖霊＝信者の教導と教会の拡大、励まし。3つの間には密接な結びつきがあります。天地創造も3者の共同作業でした。だから私たちの神との人格的交わりは、父、子、聖霊の三位一体に囲まれます。ひとつの神と交わりをしながら、三つの力強い方に囲まれている安心感です。礼拝にてキリストの救いに感謝しつつ、聖霊によって祈り、神を見上げます。伝道ではキリストの十字架を宣べて、聖霊に励まされ、結果を神に委ねます。今は聖霊、教会、終末の時代。神の交わりの温もりが被災地に届きますように。

4月10日

「霊的飢饉」

アモス 8:11-14

武安 宏樹 牧師

アモスは職業預言者ではありませんでしたが、彼の敬虔さと社会への鋭い洞察を買われて、北王国イスラエルへの預言者として、神に召されました。当時は物質的には繁栄していましたが、社会的矛盾と偶像礼拝が横行して、霊的にも低下していました。神はなぜご自分の民をさばかれるのでしょうか。それは、彼らが罪の生活を悔い改めて、神に立ち返るためです。そうすれば、あわれみを受けます。しかしついに北王国は、アッシリヤに滅ぼされます。

「その日」(9節)とは、これまで4章に挙げられてきた飢饉、旱魃、立ち枯れ、黒穂病、いなごの災い、疫病と剣、国の破滅という災害が些細に思えるほど、恐ろしい日です。さらに恐ろしいことには、御言葉の飢饉がやってくる。無関心だった人々が激しい痛みと苦しみの中で、いくら門を叩いてみても、もはや手遅れの日、「倒れて、2度と起きあがれない日」(14節)が来るのです。それが来るべき「主の日」です。今の私たちは福音を伝えることができます。「疲れた人、重荷を負っている人は〜」(マタ 11:28)と街で叫ぶことができます。けれどもそれは期限つきです。私たちが福音を伝えられない日が来るのです。あの時間いておればと地団駄踏んでも、悔い改めを受け付けられない日が来ます。

たしかにパンを水の上に投げるような働きですが、後の日になってそれを見いだすとあります(伝道 11:1)。飢えておられる方にはパンが入口なのです。私たちのなすべきことは主に従い、善を行う手を休めないこと。結果を主に委ねることです。やがて機会が閉ざされる日は来ます。でも「しばらくの間」(ヨハ 12:35)を感謝し、収穫の主期待し種を蒔き続けようではありませんか。

4月17日

「内なる苦しみ」

詩篇 55:1-23

武安 宏樹 牧師

① 苦しみの時に叫ぶこと(1～8節)

「苦しみ. うめき. 泣きわめき. もたえ. 恐れ. おののき. 戦慄」と作者は自分の激しい苦しみを赤裸々に表現します。それは平常心と対極の取り乱す姿です。私たちはこのような感情をどこに持ち込めばよいのでしょうか。よく口にする「頑張れ」とはあなたの防波堤をもっと高くし、どんな津波にも耐えよという意味にならないのでしょうか。彼は激しい感情の中で、「神よ」と呼ばわれます。切々と自らの窮状を訴えるより前に、いつでも、どこでも、どんな状況でも頼るべきお方として力強い御名を叫び、苦難の中で神との交わりを欲します。

② 神に敵対する者への敵意(9～15節)

相手が自分に危害を加えるがゆえに、敵意を燃やすのではない。かつての信仰の友がいまや神に敵対し、神と作者の行う事業の攪乱を企てるからです。「彼らのことばを混乱させ～」は、バベルの塔の出来事の引用です(創 11:1-9)。友の裏切りへの怒りは、神への裏切りへの怒りと御霊により一体化します。作者は苦難の中で神と感情を共有し、祈りの力と揺るがぬ確信を注がれます。

③ 答えられる神(16～23節)

イスラエルは夕から一日が始まるため、「夕. 朝. 真昼」とは一日中の意です。17節は2節の反復ではなく、「聞いてくださる」確信が与えられるに至ります。カルヴァン曰く「祈りの修練の中で自らを励まし、最後は良い結末と確信を抱く。」祈らされ、祈らざるを得ないことで、私たちは信仰の絶好の訓練となります。祈り続けることで、絶望から希望、闇から光が見え、裏切られた心の傷さえ、神のさばきの御手にゆだねることができます(Ⅰテサ 5:17)。祈るとどうなるか。私たちが漬け物の置き石のように重く苦しめた不安や悩みが、軽減されます。神と一つになるほど、神の摂理に重荷をゆだねられるからです(Ⅰペテ 5:7)。すると自分の狭くて主観的な空想が砕かれて、苦難の中でも平安を得ます。主イエスは多忙な公生涯の中で寸暇を惜しんで、神に祈りの時を持ちました。苦難の祈りはゲツセマネに結実しました(マタ 26:36-46)。計り知れぬ苦難の中、主イエスは二度目の祈りで「どうぞみこころのとおりをなさってください」と告白しました。「苦難→祈り→神との一致→ゆだねて勝利」を実践しましょう。

4月24日

「よみがえりの希望」

ヨブ記 19:25-27

武安 宏樹 牧師

イースターですが、被災地を覚えつつ苦難の彼方にある希望を展望したいと思います。神の前に全く落ち度のないヨブが理不尽といえるほどの苦難を受けたことは、今日の苦難に満ちた世界を覚える上で、十分だと思えます。ヨブ記は旧約の区分では聖文書に属しますが、その大半は友人との論争です。「3(人)×3(回)=計9回」におよぶ論争は、一読すると冗長とも思えますが、因果応報のエリファズ、歴史的原則のビルダテ、頑迷な道德主義のツォファルが回を重ねる毎にトーンダウンするのに比べ、迷惑な忠告に孤独感を深めたヨブはかえって神への思いが高まり、雄弁さを増すところが、面白い点です。

ヨブの願い、それは神を引きずり下ろして対等に語り合いたかったのです。自分の何が間違っていたか。何でこうなったのか。願わくば答えてほしい。3人との空しい議論の中でも、神に願うのをやめなかった。近づこうとした。神の御顔を拝するところまで、追い詰めるところまで、あと一歩という実感。その最中に彼は「私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれる」と告白したのです。これは苦難の中では現実的でなく、信仰による確信です。肉体がそのまま滅びたとしても、終わりの日に神がよみ(死者の世界)にも、ちり(地上)にも現れて、信仰者が新しいからだをもって復活する日が来る。その日が到来し、神の御顔を拝することができるのなら、他は何も要らない。極限状態にて狂おしいまで神を求め、そこに霊肉の生死全てを賭けるのです。

そんなヨブに対し、神は天から御声を聞かせてくださいました(38-41章)。その時にヨブは、神が神であることより、神に何か不足があるかのように、近づいて議論を求めた愚を示され、神の絶対主権を認めて、悔い改めました(42:1-6)。神は友人3人にはヨブのように真実に神を求めることなく議論を弄した愚を示されました。神はヨブの家族、財産を原状復帰するだけでなく、さらに以前の2倍に財産を増し加えて、家族と幸いな余生を与えられました。神に近づくことと神を正しく認識することの、両方大事ですが、優先順位は、前者が上です。神に近づくことで初めて、誤った神認識も正されるからです。死の淵にあっても、求める者に神は現れて救いの手を差し伸べてくださる。神は知識ではなく、個人的悔い改めに基づく親しい交わりを求められます。

5月1日

「人間について～同盟教団信仰告白③」

ローマ 3:9-20

武安 宏樹 牧師

「はじめに人は、神のかたちに創造され、神と正しい関係にあった。しかしサタンに誘惑され、神の意志に反逆して罪を犯し、神のかたちを毀損した。それゆえ、すべての人は、罪と悲惨のもとに生まれ、その思いとことばと行為とにおいて罪あるものである。自分の努力によっては、神に帰ることも、また、そのみ旨にかなう善行を行なうこともできず、永遠の滅びに至る。」

(同盟教団教憲第2条3)

①「神のかたち」として(創世記1:27)

創造主は天地万物を最高の作品として造られ、その中に人間も含まれます。この御言葉の「人」「彼」に自分の名前を入れて、声に出し読んでみてください。日本人は恥ずかしく思えるかも知れませんが、「神の作品」の自覚は重要です。自分をどう捉えるかで行動も対人関係も規定されますし、喜びが沸きます。自分と他人と較べなくなることで、他人を心から祝福できるようになります。「神のかたち」とは外観ではなく知性、精神といった中身のことにについてです。被造物である私たちが神と交わりを持つと、人生の真の目的を見いだします。

② 罪に沈んだ人間(ローマ3:9～20)

しかし最初の人アダムが神に背を向けたことで、罪が全人類を支配します。それによって私たちは神に喜ばれない、「的外れ」な行いばかりをするようになった。人間的な努力で近づこうとも、真ん中を射止めることはできません。それは罪によって人間の内面が破壊されたからです。神の基準については、十戒(出 20:)に明らかですが、殺し、盗み、姦淫はないとしても心の深い所で偶像礼拝や淫らな思いにふけることのない人は、おそらくいないでしょう。罪深い事実から目を背けようとする事自体が、私たちの罪人たる所以です。ユダヤ人も異邦人も、キリスト教徒も異教徒も、本質的に神の前に罪人です。けれども罪人が自分の力に絶望して罪深さを受け入れると、希望があります。

③ キリストによる回復(ローマ8:1～2)

神のかたちと聞いて想像するのは聖い神、反対に罪は悪魔的な性質です。この2つは天と地ほども違いますが、双方のギャップを知れば知るほどに、私たちはキリストを求め、救いの素晴らしさに目を開かれます。キリストの内にいのちがあり、キリストの血潮により私たちは罪から解放されたからです。背伸びした信仰生活をやめて、キリストの十字架に橋渡ししていただくと、私たちの罪深い内面に御霊が働かれ、赦しといやしを得ます(Ⅱコリ 3:16-18)。

5月8日

「和合する」

マルコ 9:38-50
武安 宏樹 牧師

ヨハネがいやしを行う他グループの活動を制止する場面から始まります。「私たちの仲間ではないので」ここに独善主義、セクショナリズムが見受けられます。前回は弟子間の内輪もめとすれば、今回は「外輪もめ」(造語)となるでしょう。主イエスは彼らの働きよりも、弟子たちの党派心を戒め、寛容を説きました。

「和を以て尊しと為す」とは、自分の主観や党派心による偏った見方を捨て、互いに謙虚に話し合うことで得た合意は、道理に合うものとなる意味です。「和」の精神とは心の低さと広さが問われているように思います(箴言 15:22)。神は地位の高い者を重んじ、低い者を軽んじたりはしません(1コリ 1:27-29)。私たちに些細に思える「水一杯」でも捧げたいと、神を愛する人々に対して、兄弟姉妹として受け入れ、逆に彼らをつまずかせる狭量な者を怒られます。その代償はゲヘナ=火の池(黙 19:20)に投げ込むに価するとまで言われます。私たちが狭量ゆえに人をつまずかせたら、それは不幸なことです(イザ 42:3)。

「火」はゲヘナから転じて、狭量な私たちの肉の部分焼ききよめる火です。「塩」は世にあって純粋な白さ、防腐剤、味をつける存在になること(マタ 5:13)。「火(聖霊)のきよめ→塩気ある信仰→平和をもたらす者」の流れが重要です。私たちが党派心からきよめられ、主イエスの寛容な愛をいただくためには、他人に対する前に、まず自分に厳しく批判の目を持ち、限界を悟ることです。そうでないと、自分の立場を絶対視して、他から謙虚に学ぼうとしません。心を開いた話し合いから多くの友が与えられて、その交わりが「和合」となる。和合を通して、その交わりが麗しいことを外からも見る事ができるのです。

「米国が最も強大な敵としなければならないのは敵の国々ではなく、自らの立場を絶対とする精神的傲慢であり、米国の立場と神の摂理を同義と見て、平然として恥じない偶像礼拝である。」(神学者ラインホルト・ニーバー)

十字軍以来歴史的に、現代ではベトナム、湾岸、イラク各戦争の背後には、自国の利益のために血を流すことを厭わない、偏狭な原理主義が横たわっています。報復合戦の背後で、私たちは「和合」のために何ができるでしょうか。「愛の使徒」に成長したヨハネと共に、神の愛に学びましょう(エペ 3:18-19)。

5月15日

「私たちの交わり」

Iヨハネ 1:1-4

佐野 慶 師

「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです(3)」

ヨハネの手紙 I は、クリスチャンの交わりの素晴らしさについて書かれています。イエス・キリストによって与えられた交わりの素晴らしさを味わい、感謝しましょう。

①「交わりの土台」(1-2)

私たちの交わりの土台となるもの、それはイエス・キリストによって与えられた永遠のいのちです。神であるイエス・キリストが、実際に私たちが触れることのできる人となって来てくださったこと。そして、十字架の死にまで従われたことにより、私たちの罪を贖ってくださったこと。そして、教会に集う私たち一人一人が、イエス・キリストの十字架のもとに集められていること。これが、私たちの交わりの土台です。

②「交わりの本質」(3)

「交わり」とはギリシャ語で「コイノニア」＝「分かち合う」という意味です。つまり私たちの交わりの本質は人と人の関わりだけではなく、神様を加えた三者で、共に分かち合い、共に労する、ということ。キリストの喜びを分かち合い、キリストの悲しみを分かち合う。また、互いに祈り合うことによって私たちの痛みを主と共に分かち合う。これが主にある交わりの本質です。

③「交わりの目的」(4)

私たちは、なぜ交わりを保つのでしょうか。それは、私たちが神を喜び、互いを喜ぶためです。ウェストミンスター小教理問答では、以下の問と答があります。

問 「人の主な目的は何ですか。」

答 「人の主な目的は、神の栄光を現し、永遠に神を喜ぶ事です。」

教会の交わりが、主にある喜びにさらに満たされていくように祈りましょう。

5月22日

「結婚の本質」

マルコ 10:1-12

武安 宏樹 牧師

主イエスと弟子たち一行がガリラヤを出発して、エルサレムに向かう道中、パリサイ人が離婚の是非につき、主イエスの返答を罠にかけようとしてきました。主イエスは共通の基盤である、モーセの律法について問い質した後(申 24:1)、驚くことに離婚のシステムではなく、結婚のシステムについて語られました。律法の本質は「主を愛せよ」(マタ 22:37)に完結しますが、彼らは律法の網目をかいくぐることに終始し、「律法以前」に創造の恵みについて全く盲目でした。

主イエスは創世記2章を引用し、神が男と女とに人間を創造されたことを語られました。男性のあばら骨を取って女を造られ、神は二人を出会わせた。僅か数節に男女の奥義が明らかにされています。男女が互いに求めあうのは、欠けを覚えるからです。互いに助け合い尊敬し合うのが真の男女の関係です。男尊女卑や封建的主従関係ではありません。原語や染色体に象徴されますが、「見えない赤い糸で～」などと言うように、男女の出会いは素晴らしいものです。

「一体」とは密着や結合の意味です。切手をはがすと双方に傷がつくように、男女の関係も離すと心身共にダメージが残ります。それほど密接なものです。結婚に先立ち親からの精神的、経済的自立が必要で、そして結び合うこと。子をもうける以前に、夫婦が心も体もしっかり結び合うことです。そして、自立とは精神的、経済的に加えて、神との「霊的」結合が求められるのです。

主イエスはここまで結婚の奥義を語られて、離婚について合法か不法か云々することがいかにナンセンスかを悟らせました。弟子たちにしてみれば、律法解釈が緩いと思っていたら、実はパリサイ人以上に厳密で深いことに、驚きを禁じ得ませんでした。ならば「結婚しないほうがまし」(マタ 19:10)との返答は、まだ結婚の奥深さより厳しさしか解さなかったことを示しています。私たちは結婚関係→神との関係に置き換えると、類似性がよく分かります。「一体」とは、「二人」でありながら「一人」であること。だから一体化を通してどちらも深められ、夫婦の親密さを通して、神との関係性を会得するのです。パウロは夫婦関係をキリストと教会の関係に昇華させています(エペ 5:22-33)。この切り離すことのできない「神・男・女」のトライアングルこそ、交わりです。

5月29日

「私をあわれんでください」

ルカ 18:9-14

布施 恒夫 師

わたしの信仰生活の中で私が今あるのは、神のあわれみであることを近頃特に示されて感謝しております。そのことを今日の聖書箇所からあらためて確認したいと願っております。

①「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとはパリサイ人で、もう ひとは取税人であった。」(10 節)

パリサイ人は祈りました。

「私はほかの人のようにゆるる者、不正な者でないことを感謝します。」

他の人と比較して自分は違うことを感謝しますと自分を誇る祈りでした。それに対して、取税人の祈りは「罪人の私をあわれんでください。」です。

②主は言われました。「この人(取税人)が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。」(14 節)

祈りは人に聞かせたり吹聴することではありません。取税人は、「こんな罪人の私をあわれんでください。」と祈ります。自分は神の前に立つことはできない罪人であると悔いえずおられます。あわれみを求めます。主は悔いせずおられる人の祈りを受け入れられます。

③使徒パウロは「私は以前は、神をけがす者、迫害する者でした。それでも信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」(I テモテ 3 章 13 節)と告白しています。

ちいろば牧師と自称した榎本保郎師は、「神の恵みによって、私は今の私になりました。」(I コリント 15 章 10 節)を引用して「今あるは神の恵み」のことばをよく口にされました。

まことに「あわれみ」だけが私を神さまの前に立たせてくださいます

6月5日

「キリストについて～同盟教団信仰告白④」

ローマ 10 : 1-13

武安 宏樹 牧師

「主イエス・キリストは、父なる神のひとり子であって、聖霊によりやどり、処女マリヤより生まれた。真の神にして真の人である。主は我らの罪を贖うために十字架にかかって死に、葬られ、3日目に甦えり、永遠の生命の保証を与えられた。主は大祭司として父なる神の右に座し、我らのためにとりなしたもう。」
(同盟教団教憲第2条4)

名前の由来ですが、「イエス」＝「主は救い」、「キリスト」＝「油注がれた者」という意味です。前回は人間論から、壊された神のかたちがキリストにより回復する流れを見ましたが、今回はキリスト論から救いの適用ということで、律法と福音の関係、信仰義認について、ローマ書から学びたいと思います。

パウロは異邦人宣教のために使徒とされましたが、ユダヤ人同胞が福音に対してかたくなであることに心を痛めていました。彼もかつては同様でした(ピリ 3:6)。しかし完璧ゆえ非難はされなかったでしょうが、救いの達成感はありませんでした。心の奥で敗北感を感じつつ、表面的に熱心だったのです。神のために何かをするのは、ユダヤ教含め全ての宗教がやっていることです。けれども正しい神認識のないままに、律法にしがみついて難行苦行をしても、そこには救いはありません。人間が律法を完璧に守るのは不可能だからです。「終わる」(4節)には他に「達成する」という意味があります。キリストのみが、律法を全うされた。だから私たちの行いは問題外で、ただ信じることです。

アブラハムはじめ旧約の信仰の偉人たちが、「さらにすぐれたもの」として待望したのは「信仰の創始者であり完成者であるイエス」でした(ヘブ 11-12:)。彼らは律法による不完全な救いの彼方に、罪深い自分の彼方に、真の救い主を展望していました。遠くでない、近くにあるものとして御言葉は働かれます。私たちはユダヤ人のように自らに律法を課して、途方もない修行を行ってはいないでしょうか。デボーションも伝道も献金も内面から喜んでされるとしたら、大きな祝福ですが、恐れから表面的に行うとしたら、それは大きな束縛です。

11～13節には原語で「すべて」が4回、9, 10, 13節には「救われる」が3回、それぞれ使用されています。旧約聖書の豊かな救いの招きに驚かされます。救いは神の上からの恵み。私たちは律法から解放されようではありませんか。

6月12日

「子どもたちと神の国」

マルコ 10:13-16

武安 宏樹 牧師

本日はペンテコステです。弟子たち他一同に聖霊が降られたことにより、上からの力を受けた彼らは証人として、福音のために地の果てまで宣教した。そして各地に教会が建て上げられた。力強い伝道の原点は聖霊の働きです。今日は「子どもたち」と「神の国」に、「聖霊」の働きを合わせて見ていきます。

前回(9:36-37)は主イエスが呼び寄せましたが、今回はおそらく親たちが、自分の子どもたちを主イエスから祝福をいただくために、連れて来ました。弟子たちは前回教えられた子どもたちへの関わりを、理解していなかった。ポデイガードとしての使命感から怖い顔して親たちを門前払いすることで、側近としての自分たちの価値を高めていた。これに主イエスは憤られました。主イエスが「憤る」のはここだけです。主イエスは自分が不当な扱いを受けて、十字架上でさえ相手の赦しを請いましたが、それが御父や他人に対してなら、怒られた。弟子たちの上から目線の怒りと、主イエスの下から目線の怒りが、対照的です。小さな者の側に立つ主イエスの怒りは、感動と尊敬を残します。「来る者拒まず」が主の愛。社会の周辺や生産的でない人々をも招いています。それができるのは、主イエスがかけがえのない「神のかたち」と見るからです。

良寛和尚やジャン・バニエ司祭の視点の中には、子どもや障がい者の心の中に、豊かな世界を見出していたのだと思わされます。「今や、この人たちこそ、私たちの解放者であると、はっきり確信するようになりました。」(ジャン・バニエ)今日の箇所「子ども＝神の国」と喩えられているならば、これらの人たちに、私たちがどのように関わるかで、キリスト者の霊性が如実に現れるでしょう。霊的魅力のある人々は例外なく、神の前に赤子の如く純粋な信仰者なのです。神は弱者を含めて全ての人を愛しておられ、全て人は奥底で神を求めます。だから手段は何であれ、双方が心を共有するところに神の国は広がるのです。

主イエスと子どもたちはすでに神の国を共有しようとしていた。そこには聖霊の働きがありました。対して弟子たちやパリサイ人たちは自分の概念で神の国を捉えているに過ぎませんでした。私たちの中の神の国が狭ければ、福音は伝わりません。主イエスのように身を低くする時に聖霊は働かれます。

6月19日

「光の中を歩む」

Iヨハネ 1:5-10

佐野 慶 師

今日の箇所には「神は光である」とあります(5節)。ですから、神と交わりをもつ(6節)、ということはずなわち、神の光の中を歩むことです。神の光の中を歩む時、私たちは自分の罪が神に知られていることを、はっきりと自覚するようになります。それは幸いなことですが、神さまから離れたいと願っている時、それは重荷にもなります。

聖書の中に、神の光の中を歩んだ人と歩まなかった人が対比されています。光の中を歩んだ人の代表は、ペテロとダビデです。彼らは大きな過ちを犯しましたが、神の前に心からの悔い改めをし、神の前から離れませんでした。

光の中を歩まなかった人の代表は、イスカリオテのユダと、サウルです。彼らは、大きな過ちを犯した時、心からの悔い改めをしようとせず、自分の思う解決を優先し、神の前から離れていきました。

イエス様の十字架の贖いを知っていてもなお、神の前に罪を隠そうとすることは、光のうちを歩むことを拒否していることと同じです。神にすべてを知られていることは恵みです。すでに十字架の贖いがあるのですから。

私たちが神の光のうちを歩む時、そこには2つの結果が現れます。それは、「交わり」と「罪のきよめ」です(7節)。交わりとは、ただ楽しい時を過ごすだけでなく、イエス・キリストの素晴らしさが分かち合われること。そして、罪のきよめとは、赦しの確信と、罪から解放されたいという強い願いです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(9節)

6月26日

「捨てて拾いのち」

マルコ 10:17-31

武安 宏樹 牧師

① 金持ちの青年(17～22 節)

主イエスと出会う青年の態度は熱心と尊敬に満ちた素晴らしいものでした。しかし一つ間違っていたのは、神の国を自分の手で届くと思っていたこと。「私は何をしたらよいでしょうか」「何がまだ欠けているのでしょうか」(マタ 19:20)十戒に記されていない霊的奥義を、いくら払っても教えてほしかったのです。しかし主イエスの答は、彼にとって予想外・不可能・ショッキングな答でした。ありがたい奥義でも何でもなし、これまでの蓄財を帳消しにすることでした。彼は神より自分の財が大事で、永遠のいのちのために捨てられませんでした。語られた十戒の後半(対社会)は、彼にとって当り前に守っていたことでした。けれども前半(対神)をないがしろにして、後半を真に守ることは不可能です。彼は残念なことに主イエスを後にしましたが、全てを捧げることが無理でも、「信じます。不信仰な私をお助けください。」(9:24)と表明すればよかった。まだ若かったのです。そんな彼が砕かれて再び門を叩く日を神は待望します。

② 献身と保障(23～31 節)

前途有望な青年が救われなかったことは、弟子たちにとって衝撃でした。青年も弟子たちも共通した考えは、神の国を行いの報酬と考えていたこと。私たちが入信、それ以降も、際限ない「doing」に陥ってはいないでしょうか。弟子たちは金はなくとも、信じてすぐ弟子とされた恵みをどこか置き忘れて、自分たちの救いや、仕事・家族を全部置いてきた報いはあるだろうか不安に苛まれていました。弟子たちはまだ神よりも、自分の献身に頼っていました。「どんなことでも、神にはできる」そんな彼らを見越して、主イエスは励ました。ペテロの頓珍漢な訴えにも叱ったりせず、優しく100倍の報いを約束された。無報酬どころか大報酬。それも後の世のいのちだけでなく、現世利益をも!同時に「迫害の中で」「先の者があとになり、あとの者が先になる」と付け加えるのを忘れなかった。あの青年より先と錯覚した弟子たちは冷水をかけられた。救いとは徹底的に人間の期待でないことが分かります。自分の十字架なしに、報酬は得られない。しかし捨てると全ての財産に加えて永遠のいのちを得る。この道について主イエスは青年にも弟子にも私たちに、期待をしています。

7月3日

「聖霊について～同盟教団信仰告白⑤」

エペソ 1:13-14

武安 宏樹 牧師

「聖霊は、恵みによって、我らに、父と子を示し、罪を認めさせ、赦しを与え、我らを新たに生まれさせ、神の子としたもう。人が義とされるのは、自分の行為によるのではない。主イエス・キリストが身代わりに死んでくださったゆえに彼を信じるただその信仰によるのである。さらに、聖霊は、信じる我らの中に住み、我らを聖化し、我らにみ旨を行なわしめ、助け主・慰め主として世の終わりまでともにあり、我らをキリストの共同の相続人としたもう。」

(同盟教団教憲第2条5)

キリスト者が未信者と異なることは、「聖霊の証印」(エペ 1:13)を押されたことです。それは天国行の切符となり、この世でも天の祝福をいただけます。「聖霊論」について「聖化」と「賜物」の両側面がありますが、どちらも大事です。現在進行形で働かされている聖霊について正しく知り、目が開かれることです。

①人格的に救いに導く聖霊の働き(聖化)

私たちの救いの計画は三位一体の神によって、天地創造の前まで遡ります。この時すでに選びの計画の中になりましたが、罪人は自分から応答ができず、そこで聖霊は私たちが救いに応答するよう、四方八方から悔改めを促します。回心は聖霊の働き、それに伴って「新生」「義認」「聖霊の証印」が与えられます。この信じた瞬間が「聖化」のスタートです。私たちが何を行ったかではなく、聖霊とどのような関係にあるか、御前に告白し赦しを得ていない罪がないか、聖霊を悲しませる偶像を抱えていないか。自分を通して聖霊の働かれる状態にあるかどうかが大事。御前にへりくだり、真実な交わりにより成長します。順風満帆より試練の時ほど成長します(ヤコ 1:12)。聖化の終点は「栄化」です。死か再臨のどちらか先の方ですが、似姿に 100%変えられる至福の瞬間です。

②奉仕を導く聖霊の働き(賜物)

パウロはローマ 12 章や I コリント 12 章にて、キリストのからだの視点から与えられた聖霊の賜物について語ります。だれでも3つは賜物が与えられていると言われますから、賜物がないから役に立たないというのはナンセンス。ないのではなく、与えられた恵みを知ろうとしないのは、むしろ不信仰です。地中に埋めることなく(マタ 25:14-30)、与え合う(ルカ 6:38)のが霊的原則です。聖化と賜物は密接に結びついて、キリストのからだとして健全に成長します。

7月10日

「下る神、上る人」

マルコ 10:32-45

武安 宏樹 牧師

3度目の苦難予告から、弟子たちがどのように受け止めたかの場面です。ただの繰り返しではなく、3回目は壮絶な光景についてさらに詳述します。変貌山以来エルサレムに向かって標高は下るも、精神的には上っています。

主イエスは先頭に立って歩きだした。緊張感と共に戦慄の予告がなされます。異邦人に引き渡されるとは、捕囚以来600年間のユダヤ人の希望が破壊され、「あざけり、つばきをかけ、むちうち」は極限の苦痛を、絵のように語ります。

張りつめた緊張感の中で、弟子たちは何とも見当違いなお願いをしました。残虐な最期にご一緒したいと懇願するのではなく、「右と左にすわりたい」と自分たちの名前を遺すことばかりが関心事でした。彼らの動機は不純でした。

2人に「抜け駆け」と残りの10人も憤慨する始末。主イエスはどうか対応したか。頓珍漢な彼らの願いを斥けるのではなく、質問を通して真意を問うたのです。神の怒りの「杯」と荒れ狂う大水の「バプテスマ」を、あなた方は受けるのか。十字架の上で現される「栄光の座」を、あなたがたは本当に望んでいるのか。ここで主イエスは怒り呆れたのではない。彼らの願いを受け止めたのです。彼らの願いは予想と全く違う形で、ヤコブは殉教、ヨハネは流刑と実現した。口から出まかせの言葉すら、摂理の中で「願ったり、適ったり」となりました。

そして2回目(9:35)同様に、弟子たちが仕える者となるように勧めます。上昇志向の弟子たちに対して、何度も同じことを教えなければならなかった。彼らは人間的な野心に満たされており、十字架の教えに反するばかりでした。

けれども主イエスはそのような思いを排斥するより、用いて教育をされました。天の神に近づこうとする者は上昇志向ですが、集まれば争いは避けられない。そこに人間の形を取られて、徹底的な謙遜の故に高く上げられた主イエスを、私たちは模範とします。「その意気や良し。その代わり十字架道は苦しいぞ。」荒削りで他人以上に成長しようとした弟子たちの野望すら、神は摂理の中で、陶器師のように取り扱われ、きよめられるのです。私たちも謙遜を学びつつ、主イエスの弟子を思う懐の深さと、将来に期待する洞察の深さを思うのです。

7月17日

「神のうちを歩む」

ヨハネ 2:1-6

佐野 慶 師

① 弁護者がいる幸い

イエス・キリストは、私たちが無罪であることを弁護するのではなく、罪の負債はすべてご自分が支払われたと、私たちの傍らに立って弁護して下さる方です。イエスは「なだめの供え物」と書かれている通り、私たちの罪に向けられた、聖なる神の怒りをなだめるために、十字架にかかって下さいました。ですから私たちは、自分の罪責を心配する必要はないのです。

② 神を知る幸い

3節の「命令を守る」には、「罪を犯さない」という消極面と、「愛する」という積極面があります。私たちがイエス・キリストの贖いによって、救われたことを確信するなら、私たちは、イエスを十字架につけた「罪」を忌み嫌うようになります。そして、イエスのように愛することを追い求めるようになります。それは、聖霊の働きです。ヨハネは、信じた者にこのような聖霊の働きかけがあることを、「神を知っていることがわかります」という言葉で表現しています。

③ 神のうちを歩む幸い

ここでは、3節と5節が対応しています。みことばに信頼し、喜んで神のみこころを行おうとしていくなれば、私たちの人生は変わります。私たちが神と共に歩もうとした時、神ご自身の方から私たちに交わりに招いて下さるからです。

7月24日

「弟子の見本」

マルコ 10:46-52

武安 宏樹 牧師

盲人のいやしの記事には、ベツサイダ(8:22-30)やシロアム(ヨハ9:1)などがありますが、それぞれ主イエスと盲人の対応が違うのが興味深いところです。盲人の信仰としては、バルテマイは前二者と比較してピカイチと言えます。エルサレム近郊の幹線道路に面したエリコの町で、過越巡礼にも盲人ゆえ参加できなかったであろうバルテマイは、「これはいったい何事」(ルカ 18:36)と主イエス一行の訪れを霊的に敏感に察知し、所構わず空気も読まずに御名を叫び続けます。肉体的・社会的・宗教的に救われようのなかった彼は、今までどれほど救い主を待ち望んでいたことでしょうか。「千載一遇」の機会到来と確信した彼に、物見遊山やどっちつかずという漠然とした思いは皆無でした。同じく決死の覚悟で来た長血の女(5:25-34)や、ろうあ者の父親(9:14-29)は、いやしが目的でしたが、彼は底辺の自分をも救うことができる全能の神への信仰によって、自分が呼ばれたと聞いた瞬間に全てを捨てて駆け寄りました。主イエスにとって喜びでしたが、弟子たちが召命時の純粹さを思い出す上で、彼との出会いは格好の実物教育、弛緩した献身の姿勢を正す時となりました。

「わたしに何をしてほしいのか」とは、主イエスが彼の思いを知らなかった訳ではなく、自分の口で改めて告白させることにより願いを明確にしたのです。信仰告白は霊的に力のある行為ですから、悪魔はそれを妨げようしますが、彼のように全てを捨てた人は、足がかりがなく攻撃されようがありません。だから「目が見えるようになる」願いを躊躇なく明確に主イエスに伝えました。医者に自分の症状を明確に伝えるのは当然ですが、「魂の医者」の前で漠然としている人が何と多いことでしょう。けれども彼は自分のどこが悪いのか、そのためにどの医者にかかるべきなのか、この2つを明確に悟っていました。結果として瞬時に彼はいやされた。「あなたの信仰があなたを救った」のです。最後に「ついて行く」は「弟子となる」の意味が含まれています。これはまさに、「すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った」(1:18)を思い起こす光景です。私たちはバルテマイの「入信即献身」の信仰を、弟子の見本とすることです。そして「捨てて、従う」スピード感を、日々の信仰生活に持続させることです。

7月31日

「エルサレム入城」

マルコ 11:1-11

武安 宏樹 牧師

① ろばの子を借りる(1～6節)

ベタパゲとベタニヤはオリーブ山の各々西と東南にあり、エルサレムから3^キほどの村です。オリーブ山はゲツセマネや昇天など関わりの深い山です。そこで弟子たちは、つながれているろばの子を連れてくるよう命じられます。ろばはパレスチナで広く乗用・運搬・農業など用いられる、働き者の家畜です。一方で西洋では「愚か者」の比喻など、馬の華やかさとは対極の地味さです。何故ろばなのか。疑問を先回りしてか「主がお入用なのです」と言われました。実は旧約の預言に「柔和でろばに乗られる方」(ゼカ 9:9)として、入城のことは語られていたのです。この預言を知っていたかわかりませんが、弟子たちは命じられた通りにろばを連れて来ました。弟子たちは異議を唱えたりせず、肅々と従う中に、主イエス・弟子たち・ろばが仕える者として、「三位一体」となる質素な中にも平和な一致を、受難週の門出に見ることができるのです。

② エルサレム入城(7～11節)

他の用に使われたことのない、「聖別された」子ろばがぎこちない足取りで、主イエスを乗せて入城する中に、戦いを控えた王の力強さは見られません。しかし群衆の熱狂は、馬に乗るナポレオンがハパリに凱旋するかのようでした。「ホサナ～」の賛美は詩 118 篇の引用ですが、150 年前にシリアの抑圧から解放された歓喜を思い起こして、神殿の祭司の代わりに群衆が叫んだのでしょう。歓迎と尊敬の思いを表して、各人が上着や木の葉を道の上に敷き詰めました。主イエスのつつましい入城と群衆の熱狂の間に、ギャップが存在しましたが、人々の期待と霊的に混沌に違和感を感じつつも、賛美を受け止められました。そこには誰もはや止められない賛美の渦が巻き起こったのです(ルカ 19:40)。栄光に輝く王として堂々たる入城の一方で、苦難のしもべ・平和の君として庶民的なろばに乗られ、「栄光と苦難」のメシヤ預言は成就していくのです。この群衆は扇動されて後には、十字架上の主イエスを嘲り唾吐きかけます。自分たちの勝手な期待で変心し、後に裏切られると知っていながらそれでも、何の抵抗もせずに口を開かない姿は(イザ 53:7)、ろば同様「愚か者」でしょう。けれども熱狂にも迫害にも、変わることなく肅々と御心の実現に生きる姿に、絶対的に神の御手の中にある確信から来る、従順と謙遜を学ばされるのです。

8月7日

「教会について～同盟教団信仰告白⑥」

エペソ 1:15-23

武安 宏樹 牧師

「教会は、聖霊によって、召し出されたキリストの体であって、キリストはそのかしらである。贖われたものはみなその肢体である。地上の教会は、再び来たりたもう主を待ち望みつつ、聖書の真理に立ち、礼拝を守り、聖礼典を執行し、戒規を重んじ、すべての造られたものに福音を宣べ伝える。」(同盟教団教憲第2条6)

教会とはどのような所でしょうか。「神を礼拝」が真っ当な答のようですが、他にも「交わり」「伝道」「教育」「食事」(!)など、いろんな答があるでしょう。それだけ教団・教派・教会間ひいては牧師間でさえ、教会観は多岐に亘ります。だから教会とは何かについて、掘り下げて考える必要があるといえるのです。

エペソ書でパウロはキリスト者が「世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び」(1:4)、「あらかじめ定められ」(1:11)、「召された」(4:1)者であると言っています。召されて選ばれた者の集団が教会で、私たちは「選手」です。神の計画により私たちが召されたということは、信仰生活は「団体競技」です。教会は「キリストのからだ」(ヨハ 15:5/エペ 1:23)ということは、人よりも神を、見上げることが必要で、まずは「からだ」「ぶどうの木」を黙想することです。プロテスタント宗教改革では、御言葉の宣教と聖礼典(洗礼・聖餐)を教会の中心としました。かしらであるキリストを礼拝することから、全ては始まります。「神の選び・キリストの贖い・聖霊の保証」とは、三位一体を思い起こさせます。「キリストのからだ」と「父・御子・聖霊のきよい交わり」に生きるのが教会です。

聖餐の意義は、私たちがキリストのからだの一部であることへの恐れを、感謝と喜びと共に更新することです。反対に戒規は教会の純潔と一致のため、一定期間離され悔い改めを明確にすることです。この二つは表裏の関係です。最後に教会の絶対的な目的で、礼拝から必然的に生まれるのが福音宣教です。各部分が結び合うだけでなく、失われた99%の器官のために手を伸ばすこと。「大宣教命令」(マコ 16:15)にあるように、共に礼拝することで聖霊の力を得て、内向きでなく外向きの力に満たされて「出て行く」こと。「全能の力」(1:19,20)が繰り返され、「すぐれた力＝ダイナマイト」「働き＝エネルギー」が語源です。教会の主は復活のキリストですから、爆発的な力が秘められているのです。教会には世にはない夢・希望・力がある。教会に期待しようではありませんか。

8月14日

「この国のいやし」

Ⅱ 歴代誌 7:14-15

武安 宏樹 牧師

ソロモン王の神殿奉獻の祈りと(6:)、その後主の栄光が満ちて御言葉が下った箇所です(7:)。重厚な祈りの中に彼の信仰と知恵が遺憾なく発揮され、並外れて王権が強固になり偉大な王とされても、謙虚さがにじみ出ています。そしてこの繁栄からは誰も予想もできなかった、約350年後のバビロン捕囚を祈りの中で預言していたことに驚かされます。「従順→祝福、罪→こらしめ」が霊的原則ですが、繁栄の絶頂でも墮落しようと自覚するのが知恵なのです。

私たちはいやしという語をよく使います。心に苦しみや過去の傷があれば、解放されたいと願います。神はその必要をご存知で、満たそうとされますが、本当のいやしや満たしとは、私たちの思うところを超えて個人的なものです。ソロモンの祈りへの答えは、悔い改めて神との個人的な交わりの復活による、赦しといやしの約束でした。神殿も国家も全て失い真の安息を得た(36:21)。最悪と思われるような時こそ、祈って御顔を慕い求めていやされるのです。

「いやし」の他の箇所を見ると、神との関係で用いられているとわかります(出 15:26/ヨブ 5:17-18/詩

30:2-3,41:4,60:1-2,107:20/エレ 3:22,33:6-7/ホセ 6:1-2)。聞き従うこと、打ち碎かれること、叫び求めること、罪を告白すること、e.t.c。私たちはいやしを求める時、このように真実な心で格闘しているでしょうか。他の人に、「手軽にいやし、平安がないのに『平安だ。平安だ。』と言っている」(エレ 6:14)ことはないでしょうか。カウンセリングの技法も傾聴も大事ですが、神と向き合うことがなければ、私たちは「偽りの医者」のそしりを免れません。まず私たちの打ち傷のため死んでくださった、主イエスを見上げることです。

「この国のいやし」と題をつけましたが、世の完全ないやしと平和の訪れは、再臨まで待たなければなりません。けれども私たちがへりくだり祈るなら、神は天から親しく祈りを聞いてこの地をいやしてくださると約束されます。キリスト者は地上に立てられた祭司として、自分のいやしだけでなく世界のいやしの実現のために召されています。偶像礼拝は傷を悪化させるだけです。私たちもソロモン同様「あなたの民」のため祈りとりなす者とされましょう。「世界の痛み＝わが痛み」となるかどうかはこの国のいやしはかかっています。

8月21日

「改革者ヨシヤ」

Ⅱ 列王記 23:1-25

武安 宏樹 牧師

列王記とりわけⅡは捕囚に向かって下降する一方の、暗い印象を受けます。けれども南北分裂王国時代に神は何もしなかったのではなく、多くの預言者が遣わされ、その甲斐あってヒゼキヤやヨシヤなどの敬虔な王が現れました。60年近く墮落していた南ユダを、20代の若き王がどのように改革したのか。まず大祭司でなく政府主導によって、神殿修理に着手します。すると巻物が出てきたことが、前のめりに突っ走ってきた彼の改革の転機となりました。事態を重視した彼は律法にある神の御心を尋ねようと、女預言者に求めた。答は国に対する神の怒りとさばきの宣告で、彼は衣を裂いて悔い改めました。ここにヨシヤの御言葉に対する真剣さ・謙遜さに満ちた姿勢を学ばれます。

その宣告は彼の敬虔ゆえの延期も含みましたが、ヨシヤは即行動しました。政府主導でなく、全ての民を神殿に集めて御言葉主導で改革に着手しました。王として皆が主の前に出なければならない危機感・緊急性を彼は感じていた。私たちは「聖書信仰」「御言葉中心」という言葉が形骸化していないでしょうか。彼のような御言葉への執拗さと、再臨&終末への緊迫感はあるでしょうか。巻物の御言葉を原点に、彼は偶像を破壊するため全力を傾けます(23:4-20)。破壊&撤去だけでなく、主の宮に仕えていた祭司を神殿に連れてきました。罪と断ち切っても、御言葉が植えられないと意味がないからです(マタ 12:45)。そして全ての罪のパン種をきよめた後、過越のいけにえが捧げられました。改革の完成として祝われた過越祭は(出 12:)、滅亡直前の輝きがありました。

ヨシヤの最期はエジプト王を迎撃して自滅という不名誉なものでしたが、彼の改革への評価も尊敬も、変わることなく集めています(Ⅱ歴 35:24-25)。国の滅亡と捕囚への突入を避けることはできませんでしたが、決して改革は無駄ではなかったのです。彼の死後70年でペルシャのクロス王の勅令により、捕囚から解放されて神殿再建が許されるのですが、ヨシヤの改革なしには、帰還の民の中に神殿再建のため、霊的に奮起させられた者がどれだけいたか。宗教改革と神殿再建とは決して無関係でないと思わされます。捕囚も解放も、預言されたことですが、神の計画は機械的ではなく時代時代に置かれた王や預言者たちの谷間の百合のような働きを通して、点が線となっていくのです。

8月28日

「何に軸足を置いているのか」

ルツ記 1:1-22

原 敏夫 師

私たちの人生には、何度となくままならないことが起きます。その時に、私たちが何に軸足を置いているのか明らかになるのではないのでしょうか。

① 私たちは何に軸足を置いているのか

私たちの幸せとは、夫がいて、子どもがいて、仕事があり、そこそこ豊かで、家族皆が仲良く健康で、更に信仰があったらそれに越したことはない、ということでしょうか。

② 神に軸足を置くとは

私たちの人間の幸せとは、私たちが造り、私たちを愛し、私たちをいつも見つめていてくださる神さまのご存在と、そのお方が私たちの内におられること、そしてそのお方が、永遠に私たちから離れないことを信じること、ではないのでしょうか。

③ 患難の中でなお神に軸足を

順風満帆の時に、神さまに軸足を置くことはある意味で簡単かも知れません。しかし、最も苦しいとき、神さまが見えない時、出口が見えない時、教会に行きたくない時、なお、神さまに軸足を置きつづけることこそ、真の信仰者ではないのでしょうか。

9月4日

「聖霊について～同盟教団信仰告白⑤」

ピリピ 1:27-30

武安 宏樹 牧師

私たちの人生には、何度となくままならないことが起きます。その時に、私たちが何に軸足を置いているのか明らかになるのではないのでしょうか。

① キャンプでの証し

HBC小学キャンプでリーダー奉仕しましたが、準備段階から終わりまでキャンプ全体に神の恵みと喜びが満ち溢れていたことを、感謝しています。人間的に誰の働きが大きかったとか、目に見えるプログラムの出来以前に、先行する恵みの中でキャンパーの信仰決心も、奉仕者の成長も導かれました。そしてこのキャンプで最も期待したことは、主の働きのため互いに協力することです。リーダーズの中に霊的一致があること、メッセージを語る講師のために祈りとサポートを惜しまないこと、不慣れな奉仕者を他の教職などが励ますこと。そういう中で、キャンパー・奉仕者・講師が三位一体となって、キャンプを楽しみながら、中央に主イエスが臨在される体験を皆がしました。浜名湖の他にも松原湖(長野県)・聖ヶ丘(新潟県)・日高(北海道)や、他教団のキャンプ場が信仰成長と献身者発掘の場として用いられるように願います。そして私たちも宣教協力の実を期待しながら、キャンプに関わりましょう。

② 宣教協力の必要

主イエスが弟子たちを育成する彼方に将来の教会が増え広がるヴィジョンの中には、すでに宣教協力が前提になっていました。マタイ10章に12弟子の名前が対になっていますが、これは派遣の単位が一人ではなく二人だからです。二人で支え合いながら伝道し、帰ってきたら皆で報告&感謝会を開きます。そうすると他の状況も分かるし、いっそう励ましを受けて宣教に効果的です。パウロの協力者リストや(ローマ16:)、新約のみならず旧約にもモーセにアロン、ダビデにヨナタンなど神の働きに協力者の存在はつきもので(伝道4:9-12)、そもそも創造の時に男性とともに女性が造られたことから、よくわかります。一つの御霊から各人に違った賜物が分与されるということは、逆にいえば、互いの賜物を持ち寄って一つのからだとならなければ、意味がないことです。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官」(Iコリ12:27)とある通り、教会や超教派の働きは自分の考えより宣教協力を優先すること。宣教のため一致して進むことで、賛同者と御霊の顕著な働きが与えられます。

9月11日

「いちじくと宮の出来事」

マルコ 11:12-25

武安 宏樹 牧師

① いちじくの木へののろい(12～14節)

いちじくはぶどうと共にパレスチナの代表的果物であり、聖書では転じてイスラエルの象徴として頻出します。「無花果」と書きますが、実がなるのは夏であって、春に行われる過越祭の時期には葉以外に何も見られませんから、主イエスの真意は比喻です。「時が来ると実がなり、その葉は枯れない」(詩 1:3)と神の御心に歩む人は形容されますが、葉ばかり茂っても根を張っておらず、実を結ばない律法的自己中心的なユダヤ人の信仰を、差して言ったのです。

② 宮をきよめられる(15～19節)

「それから」とはいちじくと宮の出来事の連続性を強調しているようです。「宮」「神殿」を表す原語は2つあり、ここでは異邦人の庭など敷地全体を表す「ヒエロン」が用いられています。外庭の異邦人の庭は誰でも入れる場所ですが、本来祈りと準備の場であるはずが徐々に世俗化し、いけにえや通行料などの商業的搾取の場と化していました。貧しい者や社会的弱者への配慮どころか(申 15:11)、私腹を肥やし異邦人が神と出会うための妨げにすらなっていた。この現状に主イエスは怒りを覚えて、偽りに満ちた宮を荒らし回ったのです。

③ 「信仰」「確信」「赦し」の祈り(20～25節)

そんな霊的に荒廃した宮での告発を覚えながら、再びいちじくに戻ります。国を表すいちじくが根元から枯れたのを見て、弟子たちは驚いたでしょう。彼らは逆に先のいちじくが祝福されて(雅 2:13)、「進化論的」に実を結ぶのを望んだでしょう。しかしこのいちじくのように宮も民族も荒廃が警告された。主イエスは彼らに、無から有を造られる「神を信じなさい」と言われました。霊的に死んだ人間も国家にも、いのちの息吹で再生されるのは神だからです(ハバ 3:17-19)。荒廃の中にあっても、信仰の力は神の逆転勝利を生むのです。そのため主イエスは「信仰」「確信」「赦し」の祈りで実を結ぶことを勧めます。いちじくと宮の出来事から敬虔な祈りに至るまで、全ては「すべての民」に、福音が届けられるためです。そして後に主イエスご自身が最高の犠牲となり(イザ 56:7)、私たちが神殿として御名により近づき祈ることができたのです(I コリ 3:16-17)。十字架で捧げられた犠牲を仰ぎつつ祈る者となりましょう。

9月18日

「何の権威によって」

マルコ 11:27-33

武安 宏樹 牧師

マルコ福音書を読むと宣教開始(1:15)から、昇天時の遺言(16:15-18)まで、主イエスが「信仰」について語られ、途中でもいやしへの励ましに用いられて(5:36/9:23)、かたくなで信じようとしないうダヤ人を嘆いたりしています。祭司長・律法学者・長老は議会サンヘドリンを構成しており、代表者すなわち宗教的権威が、かねてから評判になっていた主イエスの働きの権威の所在について文句をつけました。「権威」は強制力を伴う「権力」より自由意志の率が高いですが、彼らは律法を支配しつつ骨抜きにして弱者を牛耳っていました。

宗教が聖書に啓示せられた創造主の御心を行うべきであると同じように、政治も人間が委ねられた権威として、統治主なる神の御旨を実現するためのものです。だから政治的・宗教的権威のあるところ悪魔が働きやすいのです。サンヘドリンも例外ではなく、彼らと背後で悪魔が握っていた世の権威に、主イエスが挑戦しました。「神の国は近くなった」(1:15)とは、偽りの権威に対して、主イエスの出現でまことの神の権威が取って代わろうとしている。そして主イエスの権威の宣言によって滅ぶのが、世の神悪魔の国家なのです。

彼らの質問は主イエスを罠にかけて、訴えられるようにするためでした。見抜いた主イエスは逆にバプテスマのヨハネについて、逆質問を返します。彼らはヨハネに与えられた神的権威を認めるか、否定して民の暴動を招くか、返答に窮しました。主イエスとヨハネは誕生経緯から信頼関係まで密接です。ピラトやヘロデに代表されるように、世の権力者が最も恐れるのは世論です。そして世論と利害が一致すれば、神の律法に反しても遂行されるものです。権力者・世論・金＝悪魔などと単純化ができないのは、荒野の誘惑の巧妙さを見ても明らかですが、三者が手を結ぶ中央で神を見上げていない場合には、悪魔が簡単に働きやすい環境といえるかもしれません。彼らが問答の中で、選んだのはまさに後者でした。「天から」と答えて不信仰を悔い改める機会が与えられていたにもかかわらず、「わかりません」と彼らは拒んだのです。私たちキリスト者は100%神の権威の下に居り、十字架の御業の完成のゆえ、悪魔は惑わししかできません。「信仰」「確信」「赦し」の祈りの話をしましたが、揺さぶる悪魔にキリストの御名によって権威を行使することです(エペ6:.)。

9月25日

「ぶどう園の農夫のたとえ」

マルコ 12:1-12

武安 宏樹 牧師

いちじくの話は弟子たちへの教育でしたが、今日の話は祭司長・律法学者・長老といったパリサイ人の首領に向けて論争的に語られたメッセージです。イザヤ5章を引用したたとえ話ですが、補助教材的でなく、ストレートです。その妥協なき愛は、モーセやエレミヤなどの預言者を彷彿とさせるものです。

① ぶどう園での出来事(1～5節)

このたとえで登場人物に農夫が加えられていることで、ユダヤ人指導者が恵みの管理者に召されていたと分かります。神がぶどう畑に何もしなかったとの不満から民は偶像礼拝に走り、園は荒廃に任せたとありますが(イザ 5:)、「わが愛する者」=「愛する息子」ですから、主イエスも開拓に関わったのです。最高の農園で何の心配なく、主人に喜ばれるよう忠実に働けば良かったのに、どこで歯車が狂ったか、彼らは農園を自分たちの思うようにしたいと考えた。こんなことなら、主人は旅に出ないで終始見張っておけば良いではないかと疑問が沸きますが、神はロボットのようにただ成果と利潤の要求ではなく、農夫が主体的な愛で応えることで生まれる信頼関係を、一番大事にしました。少々の失敗は勿論、主人への不信感や揚げ句の果てに暴力・殺人行為にまで、契約関係ゆえに忍耐する。世の常識で考えられない「赦しの経営」を見ます。

② 最後の使者(6～12節)

遣わされた「最後の」使者は主人の息子でした。最後とはこれ以降救済措置がないことを示します。最後を表す言葉は「終り」の意ですから、主イエスが地上に来られたことで、終りの日のさばきがすでに開始したということです。忍耐の限りを尽くした後に、神は不信者のさばきと共に、園を回復されます。彼らは主イエスを通して最後通告を受けても、無関係だと突っぱねました。非常に残念なことです。神の愛を受け止められずに反抗を重ねて、神の好意を踏みにじるからです。このように悔い改めを拒む靈性こそ私たちの罪です。形式的な礼拝や言いつけ通りの仕事を行っても、行いが神を喜ばせるものではありません。そこに終始する限り目がおおわれて神の愛が分からないのです。私たちはこの方が最高&最後の救い主であると、覚えなければなりません。自分ではなく主のためにぶどう園の管理を喜んで行おうではありませんか。

10月2日

「神のものは神に」

マルコ 12:13-17

武安 宏樹 牧師

権威問答とぶどう園の農夫のたとえで罪を指摘した後に、「税金問答」です。権威問答では逆質問されて失敗に終わるも、今度の罠は難易度が高いので、主イエスがどちらに答えても足元を掬われるに相違ないと考えたでしょう。パリサイ派は反ローマでヘロデ党は親ローマ。主義主張の正反対の者同士が、「イエス追放」の旗印のもと手を組んだ。巧言令色で謙虚に教えを請うようで、何も答えなければ傲慢に見られ、「すべし」と答えれば熱心党が黙っておらず、「するな」と答えればカイザルに告訴。そんな「完全犯罪」を目論んでいました。このような惑わしに、私たちは御名によらねば太刀打ちできません(詩 64:.)。

主イエスは「偽善者たち」(マタ 22:18)と怒りと嘆きをこめて一喝されました。そして人頭税と同額の1デナリ銀貨の肖像が誰かを、彼らに答えさせました。主イエスが答えるべき内容を、主権を認めることで税金を払うべきと敢えて彼らに答えさせたのは、完全犯罪を根本から覆す鮮やかな神の知恵でした。「カイザルのものはカイザルに」とは、神が統治権を為政者に委ねて国家の下、市民がインフラや福祉など利益を享受しつつ義務を果すべきことを認める。その一方で「神のものは神に」とは、世の主権の及ばない世界があることをも、認めています。私たちの存在はじめ天地万物は神が創造され、政治的主権も神の統治の下に立てられ、神の許しがなければ立ち行かないものだからです。

今日の箇所が誤解されがちな世と神の「二元論」でなく、「二重性」なのです。地上における為政者は、神に定められた枠内で統治を委ねられているのです。だから神の法と世の法が抵触しなければ、どんな政府でも遵守すべきです。反対にこれまでの歴史で繰り返されてきたように、皇帝礼拝を命じられたり、律法と対立する場合は、命をかけ「人に従うより、神に従うべき」(使 5:29)です。納税の是非に留まらず、彼らの律法解釈が政治主権の範疇にしないことを露呈したので、主イエスに放った矢によって彼らは返り討ちに遭ったのです。私たちが世に生きる上で人間的な知恵ではなく、御名によって祈りながら、神の知恵をもって戦うこと。その時に敵は打ち負かされ、勝利を得るのです。

10月9日

「起きよ、光を放て」

イザヤ 60:1-3

田村 昭二 師

この度は東日本大震災等で人の力、知恵の無力さを示されました。預言者イザヤはこれらを見越して、私たちに励まし、私たちクリスチャンに使命を与えています。

① 「起きて、キリストの光を見よ。」

1節ではイエス・キリストの誕生と救いの預言が語られています。神はそのキリストに救われた人々に「起きよ(眠っていた者よ)、光を放て(死んでいた者よ)」と命じたのです。この命令は、創造のときの神の言葉、「光あれ」を思い起こさせる力強いものです。「あなたの頭上に輝くキリストの光を見よ」と。

② 「闇の世を、キリストの光で照らせ。」

2節の特に、「あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現れる。」これはイエス様のお言葉を思い起こさせます。「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。…」クリスチャンは「闇の世」にあって神の光を輝かすという使命をあたえられています。

③ 「闇の世を、キリストの光で変えよ。」3節は、聖徒に相応しく歩むということで、エペソ 5:3-8 で具体的に言い現されています。不品行、汚れ、むさぼり、口にするのも恥ずかしい行為は偶像礼拝です。キリスト者は世から聖別された聖徒です。聖徒としての自覚ある生き方があなたの隣人を変えていくのです。たとえ、人は土の器でも、内にあるキリストが周りを変えてくれるのです。

内村鑑三はこの箇所から、イースターの説教をしています。そこで、「人類はキリストによって、復活した」と述べています。その上で「しかし、『起きよ!光れよ!』と言われても起きる能力も無い者はどうするか。そのような弱い者に創造主なる神は、その復活の力(創造の力)をもって命令している。」といます。救われた罪人、別名聖徒はもっと自覚的に「あなたがたは世の光です…」と言われる、マタイ5章14節のイエス・キリストのお言葉を正面から受け止めたいものです。

9月16日

「生きている者の神」

マルコ 12:18-27

武安 宏樹 牧師

権威問答・納税問答に続いて、サドカイ人との「復活問答」が登場します。彼らは大祭司や有力者から成りますが、聖書解釈はこの世的で復活を認めず、パリサイ人とは合わないはずですが、イエス追放のため手を組んだのでした。

聖書で彼らが唯一の基盤としているのは五書で、申命記 25 章の逆縁婚規定から死者の復活はナンセンスではないかと、主イエスに質問してきました。この規定は子を遺すのが目的でしたが、一人の女性をめぐって7人の兄弟が争奪戦を繰り広げることになる。そんな復活など破綻していると言うのです。彼らは世の延長線上でしか、死後の世界を理解することができませんでした。聖書を人間的・学際的根拠で説明しないと信じないのでは、何と暗い信仰か。御言葉を通して教え導かれる、内なる聖霊の働きなど望むべくもありません。

主イエスはそんな彼らを「聖書も神の力も知らない～大変な思い違い」と言い、彼らの土俵に立って「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と申命記 25 章から復活を論証します。この世のことだけ思えば3人は過去の人。けれども「～である」とするならば、神から見れば彼らはまだ生きているのです。復活があるならば、地上でどういう関係にあったかは意味をなさなくなる。そして時間と空間を越えて、肉体の死でさえ妨げられない永遠のいのちが、存在することをサドカイ人も認めざるを得ないのです。私たちも同様です。

「聖書」と「神の力」とありますが、聖書の裏付けと生きた聖霊体験こそが、宣教の原動力であり、キリストの復活なしには宣教も信仰すらも無意味です。さらにパウロはキリストの復活に伴い、私たちも終わりの日に復活すると、語ります(I コリ 15:)。朽ちて無くなる人生に希望を持つことはできません。神は生きておられ、キリストは生きておられ、信仰の先達も生きておられる(ヘブ 11:)。肉体の他にもう一つのいのちがあることを、忘れてはなりません。モーセの目撃した柴は燃え尽きることのない、永遠のいのちの予表でした。私たちの信じる神は生きている者の神でしょうか。死んだ者の神でしょうか。あるいは眠った神になっていないでしょうか。私たちの神は天から統治し、地上で臨在を現し、終わりの日に2つを1つにして引き上げてくださいます。

9月25日

「一番たいせつな命令」

マルコ 12:28-34

武安 宏樹 牧師

主イエスが律法学者に対して、律法の要諦を明らかに明らかにされました。新約時代の私たちにも、旧新約聖書66巻のこととして適用できるものです。この律法学者は半分は議論目的でも、半分は真剣な求道心があってでしょう。律法の拡大と収縮、軽重などの果てしない議論の彼方に、何も見えてこない。膨大な知識を持って余し、知的でありながら砕かれた心を彼は持っていました。真理に飢え渴く彼の直球勝負に、主イエスも真正面から受け止められました。

① われらの主なる神を愛すること(29～30節)

「唯一」とは神々があってはならない以前に、「無い」ということです(申 6:)。十戒前文を読めば、「あなた」と「わたし」の個人的な親しい関係に契約の民が入られている。罪の奴隷からパラダイスに移された「霊的祝福」(エペ 1:3)を、いただいたと分かります。この前文なしには禁止命令ばかりのつらい信仰、全て守れたとしても神と交わりのない、独善的かつ枯渇した霊性となります。そうすると精魂尽き果てて、つつい偶像礼拝してしまう。そんな私たちを見て神は怒り以上に寂しく思われるに相違ありません。救いの喜びと感謝が、私たちを偶像礼拝の罪から守るだけでなく、「心・思い・知性・力を尽くして」主を愛する原動力となるのです。だから私たちはまず神に愛されていること、赦されていることを体験する。それが糧となって神を愛することができます。

② 隣人を自分自身のように愛すること(31節)

「神への愛」「隣人への愛」を十戒に対応させると、1～4と5～10に分けることができるでしょう。第5戒を両者の橋渡しとする説は興味深いものです。それは両者が不可分だと証するに等しいからです。復唱して理解したような律法学者ですが、主イエスはただ一般論として述べられたものではありません。サマリヤ人のたとえのように「あなたも行って同じようにしなさい」(ルカ 10:37)。神の愛によらなければ隣人への愛が空しいだけでなく、隣人への愛の伴わぬ神への愛もまた空しいということです。隣人への愛が形式的だとするならば、神への愛もその程度ということです。使徒ヨハネも証します(Iヨハ 3-4:)。私たちは偶像礼拝をしていないでしょうか。「唯一の主」の重大さを覚えます。愛の内に生きること、愛を外に注ぎ出す関係性を学びましょう(ロマ 13:10)。

10月30日

「良い地に福音の種を」

マルコ 4:1-20

松下 展久 宣教師(教団タイ国派遣)

変化するタイ、バンコクでの16年間の宣教を振り返りつつ、福音の種蒔きの大切さを考えてみたいと思います。

① 誰が蒔くか…種蒔く人、働き人の大切さ

世界宣教命令を守る人、すなわち福音の種蒔く人がいて、背後での祈りが捧げられているので、現在の教会があり、またクリスチャンがいます。そして、救われる人がおこされています。タイでは184年の宣教の歴史があり、その現状はクリスチャン人口0.5%と数字としては低いですが、トラクトは自由に配布でき、福音を聞くことに対しても抵抗がありません。ところが、タイの教会は働き人が少なく、半数は無牧で、献身者もほとんどいません。救いは神様が用意されているものです。種蒔く人は宣教師、牧師のみでなく、救われているクリスチャン全ての役割です。

② 何を蒔くか…みことばの種

タイの人々が求めている言葉は、①あなたに価値がある、②あなたは特別な人である、③あなたは愛されている、ということです。種蒔くとはみことばを語ることです。福音を伝えるアプローチとしてあらゆる機会を用いることが必要ですが、人に依存し金銭や物質的援助には危険性が伴っています。クリスチャンに愛の行為は必要でも、最も大切な事は相手の心にみことばが植え付けられているかということです。蒔いた種はすぐには芽を出さないかもしれませんが、様々な道を通して芽を出します。人を造り変えるのは金品ではなく、神様のみことばです。

③ どこに蒔くか…良い地に

種が良くても土壌が悪いと芽を出しません。タイは多民族国家、親の権威が強く、現世利益の仏教の影響、儀式を大事にするゆえ、現状ではキリスト教を受け入れにくい国民です。まず土壌が造り変えられなければ、福音はなかなか伝わりません。人間が動物と異なることは神のかたち(性質・人格)に似せて造られたことですが、罪の介入により本来の神のかたちが毀損しています。私たちクリスチャンは世界宣教に加わっていることを認識し、祈り、捧げていき、土壌が造り変えられ、救いの福音が受け入れられ、魂の収穫がなされるように祈っていきたいと思います。そして自分自身も良い土壌に造り変えられ、福音を証していく者として置かれている

11月6日

「キリスト教の死生観」

ヨハネ 11:25-26

武安 宏樹 牧師

① 聖書の語る死と復活について

哲学者ハイデッカーは名著「存在と時間」で、「人間は死へと向かう存在」と言います。全ての人間が避けられぬ事実は、いつか死ぬ時が来ることです。聖書は肉体の死が終わりではなく、死後の世界があることを明らかにしています。弟の死への無力感に打ちひしがれるマルタに主イエスは言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」父なる神が生殺与奪の権をお持ちなのは明白ですが、主イエスは、ご自身イコール「よみがえり」「いのち」だと宣言され、弟を復活させました。肉体の死は不可避ですが、死は神が創造された人間本来の姿ではありません。イエス・キリストの代償の犠牲のゆえに、信じる者は永遠のいのちを戴いて、死に打ち勝つ者となったのです。「人間は永遠のいのちへと向かう存在」です。

② 私たちと葬儀の関わり

だからキリスト教葬儀の主人公は死者でも喪主でもなく、人に生命を与え、またこれを取られる創造主なる神ご自身です。故人の地上での歩みを覚え、遺族の方々の思いを汲むのも大事なことです。遺体や遺影に頭を下げたり、捧げ物をしては偶像礼拝になりますから、前に進んだ時も故人との交わりを与えてくださった神に、感謝と栄光を帰する祈りを捧げたらよいでしょう。信じて世を去った人の霊は天の神のもとにあります。キリスト教葬儀を通し、私たちは創造主なる神を礼拝して、故人が御国へ凱旋されたことを喜びます。

この地域の葬儀の多くは仏式かも知れません。仏式葬儀は死者の霊を鎮めるためのもので故人が主人公です。もちろん焼香など偶像礼拝は避けなければなりません。かといって悲しむ親族をさしおいて参列しないのではなく、「偶像礼拝はしない」「証しはする」この2点をもとに、キリスト葬儀と同様に、前に進む時に死者の霊にではなく、神に故人との交わりを与えられた感謝を黙禱したらよいのではないのでしょうか。無礼ではなく厳肅な態度で臨むなら、参列者に証しとなるし、喪主に事前に説明すれば敬虔さの表明になります。私たちが永遠のいのちを証しするために、人の死という厳肅な時が用いられ、死に向かう方には福音を伝え、死に直面した方々には慰めを語りましょう。

11月13日

「ごめんなさいが言える時」

創世記 32:22-33:4

原 敏夫 師

① 私たちはごめんなさいが言えない。

社長も政治家も弁護士も、父も母も弟も妹も、アダムも、そしてヤコブも、言えなかった。それは、プライドのせい。ヤコブは20年ぶりに兄エサウに会うことになるが、エサウは400人の手勢を連れて自分を殺しに来る(32:6)。なぜなら20年前に長子の権利を兄から奪ったから。ヤコブは策を練り(32:7)、神に祈り(32:9～)、策を練る(32:13)。しかし、不安と恐れがある。その時、神がヤコブと相撲をされる(32:24)。そのことがあってから、翌日ヤコブはエサウに丁寧に謝る(33:3)。神様はいったいヤコブに何をされたのか。

② 神様のなされたこと

1) 神様はご自分からヤコブに近づいてこられた。ヤコブは明日殺される。この20年の労苦は徒労。妻や子どもも路頭に迷う。彼こそ世界で一番みじめな人間。しかし神様はこのヤコブにご自身から近づいて来られる(24節)。

2) 神様はお説教されず罪を指摘されず、無言で夜明けまで「相撲」をされた。

3) 神様はヤコブに負けられた。人間に負けるわけない神様が、何故わざと負けたのか？ ヤコブを受け入れ、赦された(25節)。

4) 「祝福してください」との願いをかなえられる。この場合の祝福は直接的にはエサウから救ってほしいということ。広い意味では名前を変えられたことから、真の悔い改めといえる。

③ 「ごめんなさい」が言えた。

無条件の愛を受けたヤコブは、エサウに丁寧に謝るよう変えられた(33:3)。ここに「無条件の愛を受けた者は自分の罪を認めるように変えられる」という原理を見出す。これは十字架の赦しも同じ。まず神様が十字架によって私たちの罪を赦された。だから、私たちは「ごめんなさい」が言える。

④ 私たちはどうすればいいのか

1) 神様のイメージを変える。相撲とってください。お説教しない。負けてください。ごめんなさいを言わないのに(罪を持ったまま)愛してください。今ここにおられ、肩に手を置いておられ、私たちの内に住んでおられる。

2) 「ごめんなさい」を言っても大丈夫。私たちのプライドはどうなるのか。「ごめんなさい」はアダムでも言えなかった。人には言えないこと。神様が言わせてください。だから神様がプライドも保ってください。

11月20日

「ダビデの子キリスト」

マルコ 12:35-37

武安 宏樹 牧師

一連の問答の最後に、ダビデの「子」か「主」かについて説き明かされます。人間的な解釈ばかりで、「聖書も神の力も知らない」(24節)彼らに、ご自分が何者であって何の権威でキリストと名乗るのかを語りながら問うています。

① 「ダビデの子」から

ダビデの子孫から救い主が誕生することは、サムエル・イザヤ・エレミヤ・エゼキエルなど数々の預言者によって、旧約の至る所に預言されています。ユダヤ人なら誰でも知っているだけでなく、心の拠り所になっている事柄です。新約最初の「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」(マタ 1:1)は血筋を重んじる彼らにとって重要であり、旧新約の架け橋となるものです。捕囚を通して王国を失った彼らのイメージからすれば、圧倒的に「子」でした。それはメシヤが敵国を討ち、地上的王国が再興される野心からの曲解でした。ここで主イエスは「子」を否定はせず、ダビデとの関係を通して教えられます。

② 「ダビデの主」へ

主イエスは「主」であり同時に「子」である矛盾を通して、「ただの子でない」ことを明らかにします。彼らのキリスト理解は上記で留まっていたのですが、ダビデはすでに1000年後に降誕する主イエスを、「聖霊によって」崇めていた。約束の理解を律法解釈や人間的欲望ではなく、霊的な幻として説き明かした。この「聖霊によって」与えられるキリスト信仰こそ、倣わなくてはなりません。「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」(I コリ 12:3)。44節には貧しいやもめの献身的信仰が記されています(ロマ 12:1)。いくら議論したところで心を動かされることなく、周辺を回るだけの者と、ダビデの如く聖霊による心の割礼を受けて、献身と共に恵みを受ける者との、両者の相違が浮き彫りになっています。彼らはダビデの信仰に倣わなかった。「主」との個人的関係の中で、ダビデの従順と謙遜と賛美が祝福されたのです。

「子」と「主」の一番の違いは生きた関係かどうか。血筋にあぐらをかくのは、死んだ状態です。私たちも見える価値観や関係に縛られていないでしょうか。ダビデのように主との動的な関係が第一、それから人間的性質を見ること。血筋は変わらずとも、御霊は人を造りかえながら神信仰へと進ませるのです。

11月27日

「すべてを捧げる祝福」

マルコ 12:38-44

武安 宏樹 牧師

律法学者とやもめという、ユダヤ人宗教社会の強者と弱者の対照を通して、主イエスがどのように双方を評価しているか、神の視点から学びましょう。

① 律法学者のうわべの敬虔（38～40節）

長い衣は偉さの象徴。これ見よがしに広場を歩き回り、上席を好むのは、絶えず民の尊敬を集めたいからです。虚栄心の塊、ナルシストでもあります。加えて宗教家であることを盾に弱者から搾取する「インチキ宗教家」ですが、さらに長大な祈りで敬虔を擬装し、上記の虚栄心を隠蔽するタチの悪さです。聖書の真理を正しく説き明かすべき律法学者が、こうなってしまったのは、心を尽して「神を愛し、人を愛する」（12:28-34）原則が欠落しているからです。人前で見えるのが問題なのではなく、見せようとするのが問題なのです。

② やもめの真実な敬虔（41～44節）

レプタ2枚という、当時の銭湯1回分ほどのなけなしの金額を投げ入れるやもめの信仰を主イエスは称賛しました。それは彼女にとって全財産でした。宗教家や周囲には笑われるような額でも、主イエスは重さを知っていました。聖書の至る所にやもめの保護について記され（出 22:22-24/詩 146:9/箴 15:25）、彼女は身よりもなく貧しくとも、神が顧みてくださる信仰を持っていました。その日暮らしの彼女に虚構の信仰生活を送る余裕はなく、信じるか否かです。全財産を投じて神を試したのでも、半分手元に残すでもなく、全てを捧げた。それが彼女の単純な信仰に基づく生き方であり、主イエスが喜ばれたのです。

③ すべてを捧げる祝福（Iサムエル 15：22）

初代教会のアナニヤ&サツピラの問題は、手元に残すことでなく、聖霊の働きを欺いて、少しでも自分たちが信仰深く見えるよう擬装したことでした。「隠れた所で見ておられる父」（マタ 6:4）の存在は、擬装する者には恐怖ですが、真実な者には未来を切り拓く励ましです。私たちは見える領域で敬虔な奉仕、多額の献金、雄弁な祈りをして誇ることができず、乏しくとも真実ならば、神が顧みてくださいます。私たちの霊が神が自分かどこに向くかが問題です。乏しくとも神の豊かさに信頼し捧げる者は豊かです。だから捧げきるのです。

12月4日

「終末について～同盟教団信仰告白⑦」

マルコ 13:1-8

武安 宏樹 牧師

「終わりの時に、主イエス・キリストは、みからだをもって再臨し、生ける者、死せる者を審判したもう。主は、すべてのものを新たにし、み国を父なる神に渡したもう。」(同盟教団教憲第2条7)

① 終末に起こること

神は無限のお方ですが、被造物である地球上の自然も文明も人類も終焉が存在します。終わりの時には 2000 年前には救い主として来られた主イエスが、さばき主として再臨されます。それがいつであるかはだれにも分かりません。信者と不信者とを審かれ(マタ 25:32)、信者は天に上げられます(I テサ 2:16-17)。地上は根底から揺り動かされ焼き尽くされ、新天新地が完成します(黙 21:1)。私たちは主イエスの初臨と再臨の間である、「終わりの時代」に生きています。そして主が来られる前に、信者は地上にあつてさまざまな苦難を経験します。

② 終末の前兆

主イエスが後にされたヘロデ神殿は 50 年近くかけて建築中の、途方もなく立派な宮でした。人間の叡智の結集である宮の破壊予告を聞いた弟子たちは、さぞ驚いたことでしょう。彼らの信仰は、無限の神を有限の建造物の範疇に留めていました。しかしソロモンの第1神殿奉献は違いました(II 歴 2:5-6)。わが国も敗戦と占領下の状態から、知性と努力を傾注してわずか数十年で、世界第2(3)位の経済大国へのし上がりました。しかしいくら頑張り屋でも、真の神を知ることなく自分たちの目的に邁進するこの国に、災害を通して、神は揺さぶりをかけておられます。それは日本への激しい愛です(ヨハ 3:16)。けれども終わりの時代の福音宣教は平和裡ではなく、熾烈な霊的戦いです。家族も地域社会も崩壊する中、人々は自分を受け止める環境に飢えています。再臨の間近さを恐れるサタンは、信者も未信者も偶像礼拝や魔術や占いで、あらゆる手段で創造主から引き離そうと躍起になっています(使 20:29-30)。私たちは群れを守るだけでなく、「攻撃は最大の防御」福音宣教が必要です。最終戦争では 1/3 の人間が死ぬと言われますが、今日の戦争の多さを見れば、絵空事ではありません。貧困とききは各地で増え、地震は言うまでもなく、そのような恐ろしい苦難の時代がやがて来るからこそ、私たちは悔い改めをもって真剣に神を愛すること、礼拝と交わりを実践すること、苦しむ人々を突き放すのではなく、痛みを共有しながらキリストに導くことが求められます。

12月11日

「迫害の時代」

マルコ 13:9-13

武安 宏樹 牧師

前回は偽キリスト・戦争・地震・ききんなど、世の中に起ころうとしている終末の前兆についてでしたが、今回はキリスト者個人への迫害についてです。世界の激変に惑わされず「自分のことに」(共同訳)気をつけよ、同時並行的に迫り来る様々な迫害に備えよと主イエスは語られます。御名を否定するなら迫害は止みますが、信仰を貫けば終わることのない迫害と死が待っています。迫害は旧約時代から、とくに数々の名預言者や神殿再建のユダヤ人が受け、新約時代は初代教会の使徒たち殆どが殉教、さらに4世紀のローマ国教化に至るまで10皇帝をはじめとする迫害、その後も権力と結びついて腐敗した、カトリックの異端審問などで、フスのように火刑に処せられた人も出ました。

だからいつの時代も主の弟子は、迫害と殉教から逃れることができません。しかし迫害と殉教を通して、福音宣教は終わるところかかえて前進します。ステパノの死の光景を目撃したサウロが回心したように、証しの場なのです。肉体も精神も極限状態の中で、キリストか命かの究極の選択を迫られますが、この瞬間に「一粒の麦が地に落ちて」(ヨハ 12:24)実を結べるかかかっています。「どんな反対者も、反論もできず、反証もできないような言葉と知恵」(ルカ 21:15)を聖霊は私たちに与え、福音は語られ、自分の命は奪われても勝利を収めます。ステパノは聖霊に満たされ天に居られる神と御子を仰ぎ、三位一体に囲まれ、殉教を遂げました(使 7:54-60)。迫害・殉教は孤独ではありません(ヨハ 14:18)。苛酷さ以上に、主イエスの御跡に倣いつつ、天からの祝福を期待するのです。

殉教者たちの言葉に、「真の弟子」、「苦しみの杯と愛徳の完成」、「血の洗礼」、「血が種子となって増殖」とあります。家康の家臣でキリシタンの原主水曰く、「私の切られた手足がキリストの真理を証せん証拠」彼は火刑に処せられて、以後日本でも第2次大戦中に国内外の多くの人々を、殉教に追いやりました。日本のキリスト教会は、流された多数の殉教者の血の上に立たされています。国は流した血の責任を問われ、悔い改めが迫られます。迫害が再来するなら、私たちの真価が問われる時です。苦難を通じ福音宣教が津々浦々までなされ、そして終末が来るからです(マタ 24:14)。証しのため霊的に備えられましょう。

12月18日

「苦難の日」

マルコ 13:14-23

武安 宏樹 牧師

「荒らす憎むべきもの」はダニエル書に3回登場しますが、黙示的で難しく、偶像礼拝や皇帝礼拝を持ち込んで、神礼拝を破壊・妨害するもののことです。旧約では北王国の王妃イゼベルの暴虐を思い起しますが、ダニエル書的には中間時代のアンティオコス・エピファネス王を、そして今日の箇所としては、30年後に起こるローマ皇帝による、エルサレム神殿の破壊を指しています。

前の二者は倒されたことで勝利を収めましたが、ローマの時は神殿が破壊されて敗北したように見えます。けれども主イエスの現れの前後では神殿の果す役割が違います。神殿に固執するのではなく、「直ちに逃げよ」と言われた。逃げるのは後ろめたい気がするかもしれませんが(ヤコ4:7)、神のさばきゆえ、逃げよと言われたのです。結果として残った者は惨殺あるいは捕虜となり、ヨルダン川を渡って逃げた者は助かりました。抜け殻となった神殿に救いを求めた者は滅び、主イエスの御言葉こそ救いだと言った者は助かったのです。逃げて助かったロト家と、振り向いて塩の柱となった妻の如くです(創19)。

そして「いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日」、すなわちイゼベルやローマ皇帝以上の「荒らす憎むべきもの」が反キリストとして現れて、信者は惑わしとの激しい戦いを、不信者は惑わされるばかりの、そのような時代がやってきます。私たちも一歩間違えれば惑わしに加担する危険があります。だから「気をつけていなさい」とあるように、私たちの方がしっかりしなければならず(Ⅱテサ2:3,7)、霊の見分けも必要です(Ⅰヨハ4:1-3)。多くのキリスト者は素直ですが、惑わしに抗する知恵が必要です(マタ10:16)。同じ「逃げよ」でも、キリストの方か、反キリストの方か分かれ目となります。霊的洞察は日頃どのような信仰生活を私たちが送っているかが問われます。形だけの信仰では対抗できず、怠惰を悔い改め、臨戦態勢を敷くことです。この苦難を通して私たちは聖められます。そして苦難は苦難で終わりません。選ばれた民のためその日数を減じ、間もなく主イエスは敵を打ち砕かれます。

「神は真実なれば、汝らを堅うし汝らを護りて、悪しき者より救ひ給はん」(Ⅱテサ3:3)

12月25日

「いつ来られてもいいように」

マルコ 13:24-37

武安 宏樹 牧師

終末の前兆として戦争・地震・ききんなど恐ろしい予告がなされましたが、もっと恐ろしいのが終末です。信者はいたずらに恐れる必要はありません。

① 終末と再臨の光景(24～27節)

前兆は地球上で起こることですが、終末には太陽や月や星といった宇宙的規模で異変が起こり、全てが闇に包まれるので人間は気が狂うことでしょう。不信者は福音を聞いた時に信じておけばよかったと後悔する、絶望の日です。全て暗闇に閉ざされたその時、「栄光を帯びて雲に乗って」御子は来られます。初臨のつつましやかさと逆です。この時にさばきが確定し伝道できなくなる。そのことを後悔するのではなく「からだをまっすぐに、頭を上へ上げ」(ルカ 21:28)、私たちは主をお迎えするのです。この敬虔な姿勢を常日頃から取ることです。

② 御言葉は滅びない(28～31節)

その時はいつ来るのか。全く予測不能か、それともある程度は予測可能か。具体的に 20XX 年X月X日と確定は無理でも、前兆を通して近さは分かります。まだ当分来ないと思う者には「突如として滅びが彼らに襲いかかり」(I テサ 5:3)、恐怖に苛まれる者には前兆が全て起こるまでは来ないと、冷静さを促します。たしかにいつだか分からないが、敬虔な者にとって不意打ちのようなではない。私たちは神のことばの確実さを土台として、その時に備えます(I ペテ 1:25)。信者でも罪を犯している、聖霊を悲しませている者にとっては恐怖ですが、真実な神は召した者をその時まで確実に、救いの恵みに入れてくださいます。

③ 目をさまして祈ること(32～37節)

「目をさましていなさい」と繰り返されたのは、いつ来られても胸を張れるように罪を遠ざけ、怠惰を悔い改め、霊的に聖さを追求せよということです。その時は主イエスも知らないというのは、私たちの過ぎた関心をそぐため、それより救われた者として、敬虔な生活と福音宣教に没頭してほしいのです。これらを忠実になすならば、いつ来られても平安であたふたしないのです。私たちは「一夜漬け」「偽り」「表面的」に取り繕う信仰生活から脱却しましょう。地道な信仰生活の継続が、大いなる日への平安と前兆での勝利を担保します。